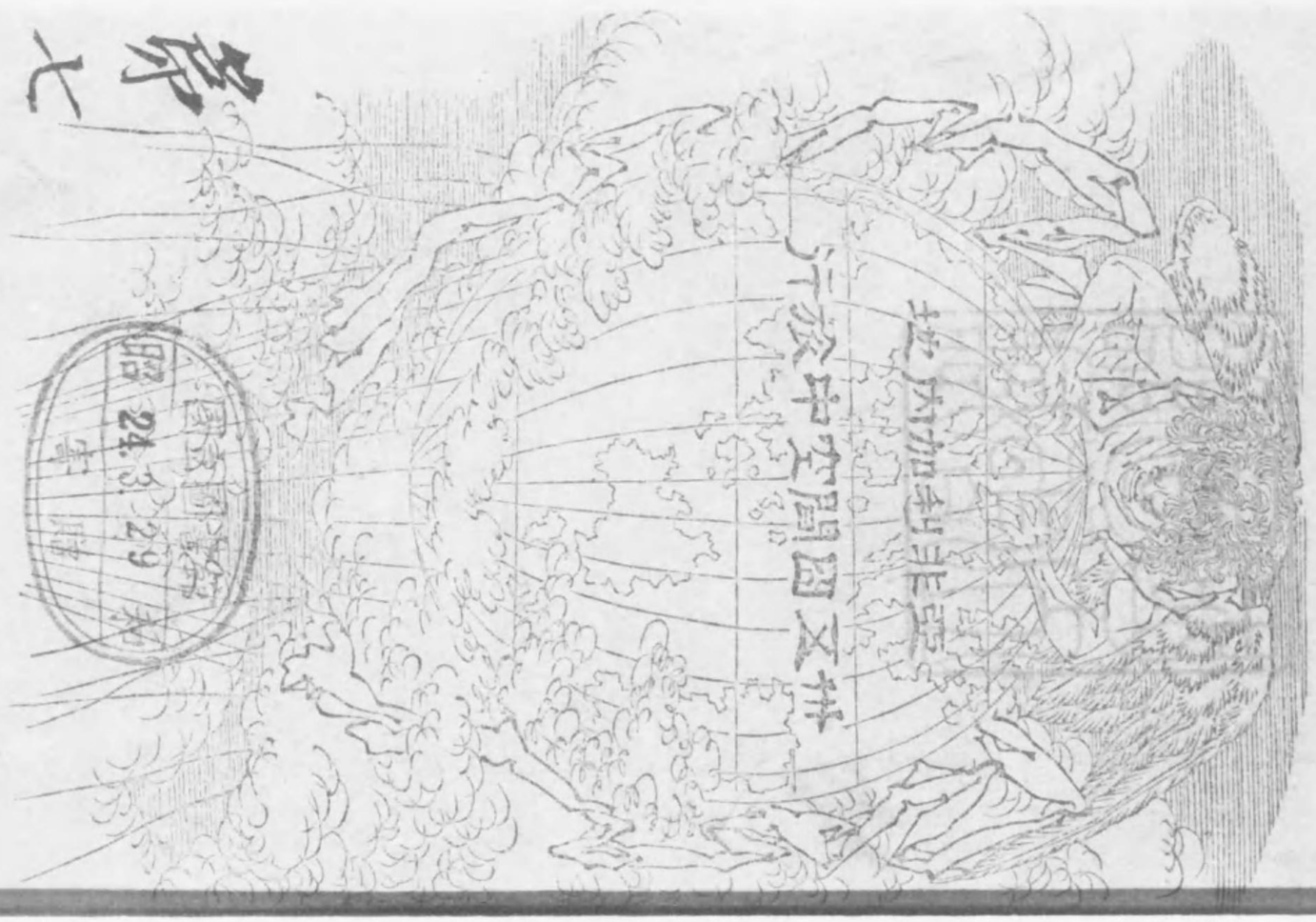


絵

阿非利加内地三十五日間空中旅行卷之七

英國　ヂユールス、ベルヌ氏著
日本　井上勤譯述
渡邊義方校正

第二十八回

浮湖上義僕全一命　黒夜狂奔陷深泥中

却つて説く「ジョーエ」は先きに湖水の中へ落下りしとき浮み上りて遙かに「ピクトリヤ」號を仰ぎ見れば猶ほ高く空中に繫りて次第々々に昇騰し見る〳〵急風に誘はれて北方遙かに進行なし忽まち見えずなりにける

「ジョーエ」は是の有様を望て見て主人及び明友の危急を免がれたるとを知り喜こんで謂へらく我れ斯く「チャド」湖へ投身するの思考を出したりしは實に此上なき幸ひと云ふ可し「ケチヂー」氏は素より思慮深き

人なれば必らず此の策を思ひ出し我に先立ちて投身す可かりしを我れ早く心付きしは實に僥倖なりし他人を救はんが爲めに我が性命を輕んずるは是れ自然の道理なり

「ジョーエ」は右の考がへを終り次に吾が身の上に及びけるが身は將に大湖の中央に處し四方の人民は皆な見知らぬ者のみにて多くは暴虐無道の蠻民のみなる可ければ之が害を逃れて身を全たふするの策復た甚はだ容易ならず「ジョーエ」は彼の鷙鳥の攻撃に先だち遠く一箇の島を望み留きたれば一先づ之れに泳ぎ着んと流石水練に熟練したれば衣を減じて身輕になり五六英里を泳ぐの準備を爲し夫より手を動かし足を働らかして巧みに水上を游泳し既に一時間半ばかりを費やしければ大いに其の距離を減じたり斯て陸地に近付きしとき始めて水邊に鯨魚の群居するとを思ひ出し元より其の恐る可きとを知るとなれば怖々ながら四邊に眼を配り既に沙汀を距る百間ばかりの所に來りけるとき一叢繁りたる樹の間より吹き來る風に連れ麝香の香ひ紛々と鼻を襲ひたり

「ジョーエ」獨語して曰く偖てゝ我が推量に違いず鯉魚の在りと覺えたりと其言葉未だ終らざるに一大の鯉魚傍近く游ぎ來りしかば早くも水中に潛りけるが背部其の鱗に觸れて少しく傷れ疵つきければ一時ゝ疼したりと覺えたり去れども恙なかりしかば一處懸命に水中を泳ぎ行き最早堪え難く覺えければ水面に浮び出でゝ生息を繼ぎ再たび水中に潛り入りて其の姿を隱したり斯て十五分間が程ゝ我にもあらで泳ぎけるが猶ほ背後の方よりして惡魚の襲ひ來る氣勢あり「ジョーエ」ゝ魂も身に添ゝず水の音を立まじと成る丈け靜かに泳ぎ居るうち忽まち我が身体を抱きかゝへて水面に引上んとする者あり「ジョーエ」

ハ大いに打ち驚ろき偖い惡魚の爲めに捕へられしかと生息つき敢えず眼を開いて何者ぞと之を見るに鱸魚にあらで二人の黑人なり緊しく我が身体を抱きて何やらん頻りに罵しり合へり

總て此の國の蠻人ハ少しも驚魚を恐るゝことなく鱸魚も亦た之を顧りみざるものゝ如し「ジョーエ」ハ此の有樣に只管眼を瞠ろかし彼の黑人の曳くがまに〳〵少しも恐るゝ氣色なく磯邊の方へ近寄りたり「ジョーエ」心中に思へらく此の蠻人等先きに「ビクトリヤ」號の湖邊に添ふて下りたるを望み又た我が空中より落るを見て人より人の落たりと思ひて斯くハ我を伴なひ行くおらん猶ほ彼等の爲すに任せて其の樣を察せんと心に思ひ定めたり

程なく磯邊に上りけれバ老若男女其の周圍に寄り集ひ地に跪いて恭しく禮拜を爲しけれバ彌々天人と思ひ過りたるとの實なるを知りし

といへども「ジョーエ」ハ須臾くも「カゼ」にての厄難を忘れず私かに心中に思ふやう我ハ神に崇められんとせり彼等ハ多分月の息子なりと思ふなる可し斯れバ我を殺すことなく何時までも助け置くと疑がひなし其の中に「ビクトリヤ」號の此の近傍を經過するとあらバ忽まち白日昇天の術を行なふて彼の蠻民等が眼を驚かす可し

斯て蠻民等ハ次第に「ジョーエ」の側に寄り近づき地上に平伏して何やらん罵しり叫び尊敬の狀顯はれたり其の中二三の蠻民ハ瓶牛乳及び米に蜂蜜を混ぜたる物を捧ち來り恭々しく「ジョーエ」に捧げけれバ「ジョーエ」は傲然として自から天神を氣取り天神の喰ひ方を蠻民等に知らし呉れんと云ふ意氣込にて頓て箸を執り上げ味ハひ見るに其の美味なると中々蠻國の物とは思はれず

兎角するうちに日暮れ夜に及びけれバ島中の巫人恭々しく「ジョーエ」

が手を携さへて神符を張り廻したる一屋の裡に伴なひたり「ジョーエ」屋内に入らんとせしとき其の周圍に人骨の累々として積み重ねたるを見心の中安からず獨り屋内に默坐して種々の事を思ひ續けぬ

此夜蠻民は聖屋の周圍に寄り集ひ或ひは聲高く唱ふもあり或ひは太鼓を打つ者あり或ひは躍り狂ふもあり其の誼びすしきと實に人をして聾せしむるばかりなり「ジョーエ」ハ小屋の裡に在りて泥土及び燈心草にて作りたる壁の隙より殘らず此の有樣を見聞せり若し之をして他の時ならしめバ「ジョーエ」も是の奇異なる典例に依りて大いに愉快を覺ゆ可かりしも心中に一つの畏恐を絶ざれバ常にもあらで悒々たり幷を如何にと云ふに從來斯る蠻國に來りし者十に八九ハ皆其の故國に回ることを得ず多くハ蠻民の毒手に罹るを常とせり去れば今ところ此の如く非常の尊敬を受くると雖ども終には彼等の爲めに喰ひ殺さ

るゝとよと思へば悚然として粟を生し總身の毛骨竪立けり

「ジョーエ」は種々の事を思ひ續くるうちに晝の疲勞を非常に覺え思はず其所に倒れ伏して前後も知らず眠りける暫らくありて身邊何となく濕氣を覺え漸々水の浸し來る容子なれば「ジョーエ」は驚ろき醒て四邊を見るに大水轟々と屋内に溢れ入り見る〳〵首を沒せんとするの勢ひなれば驚ろくと一方ならず忽ち拳を握り堅めて壁を撲地と打ち倒し突と外面に立出て四方を見れば這は如何に身は湖水の中央に在り今迄在りたる彼の島も一夜の中に沈沒し目に入るものは水のみなり「チャド」湖に在つては此の如き變事屢々あるとにて此夜も「ジョーエ」が上りたる島と他の一島を溺沒し是が爲め「ジョーエ」は不測の性命を助かりたり

「ジョーエ」は此の如きとありとは夢にも知らざりければ只管打驚ろき

て湖面を彼地此地と泳ぎ廻ろうち遙かに一艘の小舟を認めしかば是れ幸はひと泳ぎ寄りて難なく其の中に入りて見るに大木を堀り凹めたる獨木船にして底に二斑の褪ありけり去れども船は急流の中に當りたるとなれば「ジョーエ」は更らに之を漕ぐの勞なく流れに順がふて進みけり

「ジョーエ」獨語して曰く我れ先づ流れに順がふて何處までも至る可し其の中北極星顯はれ出ゐば容易く方角を辨まふことを得んと手を拱いて急流を追ふ程に翌日午前二時とも覺しき頃荊棘燈心草の生ひ繁りたる一箇の岬に流れ寄りたり頓て船を出でゝ岸に上り見るに程遠からぬ所に一本の大樹立ち居ければ是れ屈竟の寢床なりと地上は猛獸の害あらんとを恐れさら〳〵と樹上に攀ぢ登り枝に手足を緊と支へて日の出るを待ち居たり

斯て大陽東天の空に昇りければ眼を開いて四邊を見るに先きには暗夜にて心付ざりしが樹上一面に蛇蜥蜴の類群れ集まり殆んど枝も見えぬばかりなり之を見る者或ひは云はん此の樹は是れ蛇を產するの奇樹なりと今大陽の昇るに從がひて彼等も睡りを醒しけん蠢々とうごめきて其の樣如何にも怖ろしければ「ジョーエ」は嘔吐を催ふすまでに震ひ怖れ早々樹上を離れて地の上に跳び下るに其所にも蛇の這ひ廻ると幾十幾百と云ふ數を知らず

「ジョーエ」は口の裡に我れ今に至るまで斯る可しとは信ぜざりし且つ世人も此の如く多くの蛇あらんとは思はざる可しと「ウバーゲル」氏が最後の書簡に此地は蛇の多きと世界中其の比を見ずと書きたるとを知らざれば心の中大いに驚ろき早々此の地を立去らんと日影に依つて方角を定め東北を指して急ぎけり

「ジョーエ」ハ道を急ぎながら蠻人の目に注らぬ爲め成る可く人家小屋或ひは人間の住居ひろふなる穴の傍りは迂回して之れに近付かざるやうになし常に眼を天涯に注いで「ピクトリア」號を望まんとなしけれども終日影だに見えざりけり去れども土人を信ずるの心最も深ければ決して邊兒月孫氏を疑がふの念を起さゞりし

此の日「ジョーエ」は殆んど三十英里餘の道を歩行み足の疲れ甚はだしき上に飢餓交々迫りければ身体宛がら綿の如し土人の食ふ「メレ」と稱する物ハ「アーバタス」樹の根及び髓を混じたる物なるが此の如き食物にては中々身体の衰弱を補ふに足らず

「ジョーエ」は総身に透間なく荆棘燈心草の傷を受け鮮血衣を浸すばかりにて行路の難義云ふ可からず去れども志を勵まし勇を鼓して進みしが終に其の日の暮に及び最早一歩も進み難ければ餘義なく湖水の

潰にて夜を明したり此所には蠅毒蜂蟻なんど半「インチ」ばかりの蟲幾千萬と云ふ數を知らず四方八方より蝟集して「ジョーエ」の身体を嚙み整しければ其の苦きと云はん方なし兎角して二時間ばかり經る程に身に纏ひたる少許の衣ハ蟲の爲めに喰ひ盡されて一片も殘らず失たりける

實に此の夜ハ非常の艱難集まり來て既に毒蜂の害ある上に野獸猛獸近郊を徘徊し最も危險の怖れある海牛湖中に群がりたれバ「ジョーエ」ハ戰々競々として針の席に坐するが如く片時も眠ると能ハずして其の困難云ふバかりなけれども「ジョーエ」ハ耐忍の心を固めて斯る危險の惡場所に其の夜を送り明しけり

斯て翌日になりけれバ起上りて四邊を見るに「ジョーエ」が伏したりし傍ハらに其の長け五寸バかりなる蟾蜍あり圓らなる兩眼を見開きて

「ジョーエ」の顔を見詰めければ「ジョーエ」い悚然として戦慄なし終夜斯る忌いしき物と共に寝たるかと想像すれば心神悩乱するばかりなりしが漸やくにして思ひ返へし足を早めて磯邊に馳せ寄り忽ち水中に躍り入りたり斯くして暫らく水中に浸り海水浴を爲せしかば稍や身体の痛みを忘れたり夫より再たび岸に上り木葉を嚙みて飢を醫し又々旅行を始めけるが飢餓次第に身に迫りて大いに歩行に苦しみければ長き蔓草を切り取つて堅く腹を卷き括り少しく苦痛を免がれたり然るに水い十分にして渇い慮いかるに足ざれば往日沙漠中の大難を思ひ出し切て其の難に罹らざるを喜べり

「ジョーエ」肚の裏に思ふやう今風の方位を察するに將さに北風盛んなり然らば「ピクトリア」號い再び回り來る筈なるに絶えて其の影だに見ざるい何事ぞや想ふに邊兒月孫氏い氣球の破損を繕ろいんとて終日

を費やしたる可れば今日回り來らざるも亦無理からず然れども我い再たび我が主人に逢ふと能いざるものとして分別せざる可らず我れ若し湖邊の一市街に達するとあらば主人が屢々語り玉ひし從來の旅客に勝りて不幸なる目に遭ふといある可からず彼等既でに蠻國を脱して本國に歸りたる例あり我れも何んぞ彼等と同じく安全に歸鄉せざらんやと奮然決心したりけり

「ジョーエ」は此の如く且つ歩行み且つ獨語し足を早めて行く程に忽ち森の中央に來りて數人の蠻民を望みたり「ジョーエ」は是に於て歩を止め如何せんと躊躇ひしが蠻民等は絶えて「ジョーエ」の來りたるとを知らざるものゝ如し

「ジョーエ」は眼を定めて彼等の爲す樣を伺がうに「イウフォルビア」と稱する毒草の液汁を箭の尖へ塗り付くるとて更らに測見を振らざれば「ジ

ヨーエ」の來りたるとを知らざるなり此の箭の根に毒を抹るとは當國蠻民等の一大職業にて之を爲さんとするには非常の禮式を行なふたる後にあらざれば始めずと云ふ

「ジョーエ」は見付られまじと身を樹木の間に躲し息を殺して忍び居るうち不圖上の方を仰ぎ見たるに豈料らんや木葉の隙より皎かに「ピクトリヤ」號を望みたり「ジョーエ」爭でか喜こばざらん天を拜し地を拜して其の冥助の湧からざるを謝し嬉し涙に咽びしは理切て憫れなり

暫らくありて蠻民等は漸やく此の所を立去りしかば「ジョーエ」は林中を走り出で踵を回して「チャド」湖の濱に至り仰いで天涯を望み見るに悲きかな「ピクトリヤ」號ハ既に遠く飛び去りて今ハ目の及ぶ可くもあらぬ中空遙に流星かと疑がふ計の距離に在り「ジョーエ」は是に於て是非もなく氣球の再たび過るを待たんと決定せしが聞えぬ迄もと走り

行きて手を揚げ高く呼ハりたれども風勢非常に強かりければ見〳〵「ピクトリヤ」號を吹き去りて今ハ見えずなりにける

爾ば「ジョーエ」は是に至りて希望心も勇氣と共に弱り果て最早土人の歸り來るとハある可からず我ハ既に棄てられし者なりと思ひければ前後も更らに辨まへず宛ながら狂人の如く此の日暮より夜に入る迄身体手足を傷り疵つけ何處ともなく馳せ廻り或ひハ膝行するとあり或ひハ匍匐するとあり終にハ生氣も盡き果てゝ心地死ぬ可く覺えけり

斯て「ジョーエ」ハ狂乱して但在る沼の邊に來りけるが咫尺を辨ぜざる暗夜なれバ忽まち足を辷らして深泥の中に陷入りたり「ジョーエ」ハ痛く打驚ろきて左に倒れ右に顛び力の限り掙扎けども益々底深く沈み行きて既に脛まで踏み込みたり此の時苦しき聲を揚げ天を仰いで歎

じて曰く我が命終に此に終るか實に見苦しき死樣なりと猶ほも手足を働かす程に只深く沈むのみにて一木の手に纏る者なく一草の身を支ふる物なければ將さに生ながらに埋められんと欲するの勢なり「ジョーエ」ハ全つたく望みを捨て眼を閉して旦那我命を救ひ玉へと叫ぶ聲音も漸々に細り行きて黯暗たる夜色の中に忽ち聞えずなりにける

第二十九回　馳馬蠻民狩人　投梯氣球拯朋

話頭一轉「ケチヂー」氏は乘輿の前端に立出でゝ暫らく前面を望み居たりしが稍やありて首部を廻らし邊兒月孫氏に對ひて曰く人か獸かい遠くして見分け難けれども遙か彼方に當りて一隊の群集あり其の行動甚はだ神速にして盛んに砂煙を立たり邊兒月孫氏曰く其の群集と見ゆるハ我が氣球を北方に吹き去る可き逆風の砂を揚ぐるにハあらざる歟と云ひつゝ身を起して彼の砂煙を望みたり「ケチヂー」氏言を掉

つて曰く否々風にてハあらざる可し寧ろ野獸の走るに似たり邊兒月孫氏點頭いて曰く或ひハ然らん然れども此より十英里を距てたれば眼鏡を以てさへ其の詳細を見ると能ハず「ケチヂー」氏曰く我れ決して見過つことはある可からず恰も騎兵の行軍するに髣髴り彼等ハ必らず騎馬の一隊あり我れ之れを保証す可しよく眼を定めて見玉へかし邊兒月孫氏之を聞て猶ほ一層眼を凝し暫らく望み見て曰く如何にも御身の云ふ如し彼等ハ多分亞良比亞人か「チブース」人かの一隊なる可し彼等ハ我儕と同じ方向に進む有樣なり然れども我儕の進行ハ彼等より一層速やかなれバ暫らくして直ちに追ひ付く可し今より半時間を過しなバ彼等の本体を詳らかにすることを得可き故其の時我儕の行爲を決せん

「ケチヂー」氏再たび眼鏡を取り上げ彼の一隊を望み見るに現に數個の

騎馬を見其の中或る者い本隊より離れたり

「ケヂー」氏曰く彼等い何か逐ふ者の如し隊商にあらざれバ獵人ならん我い早く其の何物たるを知らんとを欲す邊兒月孫氏曰く暫らく躊躇す可し今我が氣球い一時間二十英里の割合にて進行を爲す故若し此の方向を變ぜずバ多時あらずして彼等に追ひ付く可し

「ケヂー」氏猶ほ眼鏡を放さず一心に彼の騎隊を望んで曰く我れ能く彼等を識別するとを得たり彼等い眼かに亞良比亞の騎兵にして其の數大凡ろ五十騎可り沙漠中に行軍を爲すものと見えたり其の中隊長と見ゆる者い二十歩可り前に進んで餘い其の後へに從がふたり邊兒月孫氏曰く假令ひ彼等が如何なる者にもせよ我儕に於ていい毫も怖るゝ所なし若し危險の存する時い只昇騰して之れを避けんのみ

「ケヂー」氏曰く邊兒月孫君よ暫らく待玉へ彼等の擧動甚いだ奇怪な

り今彼等の擧動と隊伍の齊のいざるとを以て考がふるに隊長に隨從すると思ひしい誤まりにて寧ろ彼の者を逐ふが如し邊兒月孫氏曰く开い眼かあるか「ケヂー」氏曰く這い決して我が思ひ違にいあらず信に純粹なる狩なれとも只だ人間の狩なり隊長と見えしい必らず厄に罹りたる逋逃人ならん邊兒月孫氏問ふて曰く开い實に逋逃人なる歟

「ケヂー」氏曰く然り邊兒月孫氏曰く決して彼等を見失なふ可からず待て〳〵我れ之を理解せん

暫らくありて氣球い三四英里バかり彼の騎馬隊に近寄りしが何思ひけん「ケヂー」氏い聲を震いして邊兒月孫君〳〵と叫びけれバ邊兒月孫氏い驚ろいて何事ぞと問ふ「ケヂー」氏曰く或ひい我が目の誤まりにいあらざるか餘りに不審しきとありと云ひつゝ眼鏡の硝子を拭ひ再び彼方を望みけれバ邊兒月孫氏い心急れて其の樣子を什麼にと問

ふ「ケチヂー」氏曰く彼い彌々其の人なり邊兒月孫氏曰く其の人とい抑く誰の事ぞ「ケチヂー」氏曰く其の人と云へば別に名を指す迄もなし彼の馬に跨がりて一生懸命に鞭を揚げ敵より僅か百歩可り距たりたるい實に彼に相違なし邊兒月孫氏色を失なひ聲を震いして曰く實に彼い「ジョーエ」なり「ケチヂー」氏曰く彼い今危急存亡の場合なれば我儕を見ると能ふまじ邊兒月孫氏竈の火を滅じて曰く否々彼能く吾儕を見ることを得るならん「ケチヂー」氏曰く并い復た如何にして然ることを得るか邊兒月孫氏曰く今より五分を經過せば我儕い地上より五十尺の高さに下り十五分を經過せば將さに彼れの頭上に達す可きを以てなり「ケチヂー」氏曰く我今銃を發ちて彼に我儕の來りたることを知らしめば如何邊兒月孫氏頭を掉つて曰く否々彼若し後方を顧みることあらば直ちに敵の爲めに殺されおん「ケチヂー」氏曰く然らば將た如何す可き歟

邊兒月孫氏曰く暫らく待つ可し「ケチヂー」氏曰く待つ可くば待つ可けれど彼の亞良比亞人等い如何邊兒月孫氏曰く我儕い今彼等を距る僅かに二英里に過ぎず須臾にして彼等に達することを得可しと其の言葉いまだ終らざるに「ケチヂー」氏い驚いて失つた〳〵と叫びたり

邊兒月孫氏之れを聞て何事ならんと彼方を佶と見るに「ジョーエ」の馬い長途に疲れしと見えて其の所に倒れたる有樣なれば邊兒月孫氏叫んで曰く彼い我儕を見たる樣子なり見よ〳〵立上りて合圖を爲すを「ケチヂー」氏身を焦燥りて曰く亞良比亞人既に後へに迫りたるに「ジョーエ」い何を待ち居るにや實に大膽なる壯丁と云ふ可し

此時「ジョーエ」い地上より起上りたるに隙間もあらせず一人の騎兵馳せ來り直ちに「ジョーエ」に擊つて蒐るを「ジョーエ」は飛鳥の如く之れを避け其の後へに飛び乘りて彼の亞良比亞人の咽を締め砂上に撲地と

投げ飛ばして其儘馬に鞭を加へ再たび彼方に逃げ行く樣なり

此時亞良比亞人は一同に鯨波の聲を揚げて「ジョーエ」の後を追蒐けしかば既に五百歩可り後ろに迫りたる「ピクトリア」号には心注ぎず只管馬を進むるうち一人の亞良比亞人「ジョーエ」間近く追ひ迫りてあはや一槍の下に刺殺すかと見る所に「ジョーエ」は早くも之を曉り腰なる短銃を取るより早く動と一發發ちければ狙ひ違はず彼の者い馬より倒さまに落ちたりける

「ジョーエ」は之を見向きもやらず猶ほ馬を驅つて逃行きたり此時亞良比亞人の一部分は「ピクトリア」号を望み見て稍や馬の足を駐め自餘の者は猶ほ「ジョーエ」を逐ひ蒐けぬ

「ケチヂー」氏呼んで曰く「ジョーエ」は今如何せんと欲するにや未だ馬の足を止めず邊兒月孫氏曰く我れ能く彼れの意想を了解れり彼はよく

氣球の針路を識別して其の方に向ひたり嗚呼實に剛膽なる壯丁かな

哉今や彼れを距る纔かに二百歩に過ぎざれば容易く彼を救ふことを得可し「ケチヂー」氏曰く我儕は將た如何す可き邊兒月孫氏曰く先づ其の銃を下に置き玉へ「ケチヂー」氏曰く諾邊兒月孫氏曰く御身能く百五十磅の砂重を擧げ玉ふか「ケチヂー」氏曰く甚はだ容易かり邊兒月孫氏然らばとて砂囊を取つて「ケチヂー」氏の手中に積み重ねて曰く御身此の砂重を持ちて乘輿の端に立出て之を放下するの構へを爲す可し然れども我が命令を下すにあらずんば決して之れを爲す可からず我れ宜き折を見計らひて御身に之を知らす可し「ケチヂー」氏曰く必らず心配し玉ふな邊兒月孫氏又曰く御身倘し此の事を誤まるときい我儕い「ジョーエ」を助くると能いず忽ち彼をして刀下の鬼と化し旅魂をして永く砂漠の中に迷いしむ可し勉めて能く爲し玉へ「ケチヂー」氏點頭い

て曰く我が爲す事にハ決して尊慮を費やし玉ふと勿れ

此の時「ビクトリヤ」号ハ大いに進行を爲して將さに追兵の頭上に來りけれバ邊兒月孫氏ハ乘輿の前端に立出て手に絹製の梯子を持ち纔至らバ直ちに下るの準備を爲し「ジョーエ」と敵の距離を測るに猶五十尺バかり殘せり

兎角する裡に「ビクトリヤ」号ハ彼の追兵の頭上を通り過ければ邊兒月孫氏「ケチヂー」氏に向つて曰く必らずぬかり玉ふな「ケチヂー」氏曰く諾此時邊兒月孫氏ハ機を見澄し手に持ちたる梯子を投じ聲を張り上げて「ジョーエ」よ〳〵と叫びければ「ジョーエ」ハ之れを聞て馬の首を立て直し後方を佶と見返りしに梯子ハ直ちに其の背後に下り居ければ手早く之れに取り付きたり

邊兒月孫氏之を見て投げよ〳〵と呼ハりければ「ケチヂー」氏ハ心得たりと彼の砂重を投じたり是に於て「ビクトリヤ」号ハ飄々として中空に昇騰しけるが「ジョーエ」ハ亞良比亞人に向つて最と可咲き身振を爲し梯子をさら〳〵と攀ぢ上りて難なく乘輿に移りければ邊兒月孫「ケチヂー」の兩氏ハ嬉し涙に搔き暮れて「ジョーエ」を共に抱きたり

「ビクトリヤ」号ハ急風に乘じて見る〳〵うちに間遠く隔たりければ亞良比亞人ハ之れを見て憤どほると甚ハだしく只だ罵々と罵しり合へり

此間乘輿の中に在りてハ何れも皆な吾れを忘れ「ジョーエ」ハ旦那よ「ケチヂー」君よと云ひしのみ其の餘ハ一言も發すると能ハず「ケチヂー」氏ハ餘りの嬉しさに宛ながら發狂したる如く拯ひ得たり〳〵と叫びたり

邊兒月孫氏ハ漸やく心を押靜め疲れ果てゝ息も絶々なる「ジョーエ」を

抱き起し其の身体を撿ため見るに殆んど裸躰にして手足い鮮血淋漓と流れ総身間なく疵を蒙むれり邊兒月孫氏い懇ごろに一々疵口を療治なし静かに天幕の下に伏さしめたり暫らくして「ジョーエ」い漸やく吾れに復し一杯の「ブランデー」酒を與へ玉へと乞ひければ邊兒月孫氏い逆らふとの不可あるとを悟り云ふがまに〳〵與へけり

「ジョーエ」い酒を飲み終りて頓て両友と握手を爲し直ちに其の身の話説を語らんと爲しけれども両友い之れを制し止め先づ眠る可しと勸めければ「ジョーエ」は之れに從がひて暫らく熟睡なしたりける

此時「ピクトリヤ」号い強風を得て稍や針路を西方に轉じ再たび砂漠の堺を望みたり俯して足下を望めば椰子樹い暴風の爲めに吹き折られて紛々に飛び散つたり

「ピクトリヤ」号い是より殆んど二百英里の旅行を爲し夕に及び東經第

十度を横切れり

第三十回　談往事慰旅情　泥中錨知有命

斯て風い終日強く吹きたる代りに夜に入りては大いに静まりければ氣球い晏然として大いなる「シカモア」樹の梢上に繋りたり邊兒月孫氏「ケチヂー」氏い交る〳〵夜を守りしかば「ジョーエ」い二十四時の永き間熟睡の夢を結ぶことを得たり

邊兒月孫氏「ジョーエ」のよく睡るを是て「ケチヂー」氏に謂つて曰く這い却つて身体の爲めに大いなる稗益を與ふるならん十分眠り足るときは自然に眠を醒す可し

翌朝に至り風力稍や強しと雖ども其の方向定まりなく或る時い北方に吹き或る時い南方に吹きしか遂に東風と變じて氣球を西方に運びたり

邊兒月孫氏い手に地圖を携さへ此の所の地名を察するに最も豊饒の稱へある「ダメルグー」の王國なり人家い皆な長き蘆葦と「アスクレピア」樹の枝を混へて作り田野にい低き足代を設けて其の上に多く穀物を積み上げたるい鼷鼠及び蟻の害を防ぐものと見えたり

暫らくして「ジンダア」の市街に達しけるに其の大いなる死刑場に依りて容易く其の「ジンダア」なることを知れり此の死刑場の中央に死刑樹高く聳ゆ傳説に依れバ常に此の樹を守る番人ありて若し此の樹蔭を過る者あるときい直ちに捉へて絞罪に處す故に此の樹を名付けて死刑樹と云ふとかや

「ケチヂー」氏磯器を見て曰く我儕い猶ほ北方に向つて進行せり邊兒月孫氏曰く何ぞ妨たげん假令ひ「チンブクツー」にまで至るとも毫も不可なきなり此の如き愉快なる且つ幸福なる旅行い未だ曾てあらざるなり「ジョーエ」欣然として頭を天幕の網に委ね邊兒月孫氏の語に亞いで曰く又た此の如き健康なる旅行い未だ曾てあらざるなり「ケチヂー」氏曰く我が勇猛なる「ジョーエ」よ御身い我儕が生命の親なり彼の後の容子い如何なりしぞ「ジョーエ」曰く我れ今に至るまで此の如き爽快なる旅行を爲したることなし始めにい阿非利加にて有名なる「チャド」湖の水に浴し後には面白き旅を爲したり邊兒月孫氏之を聞き「ジョーエ」の手を執つて云つて曰く吾が價格ある「ジョーエ」よ汝が湖水に投身せしより我儕兩人が悲歎焦心い實に容易にてあらざりし「ジョーエ」曰く我とても亦た御身等の身の上に付て非常に心を費やしたり邊兒月孫氏曰く汝が身を抛ちたるが爲めに我儕兩人能く生命を保つことを得たり倘し氣球一度湖中に墜落したらんにバ如何んぞ再たび免がるることを得んや「ジョーエ」曰く倘し我が投身したるが爲めに御身等の性命を救ひしと

ならば同じく我が性命をも助けたりと云ふ可し彼時三人共に湖水の泡と消えたらんにい如何んぞ今の如く相對して談笑するを得ん邊兒月孫氏笑つて曰く斯る人と共に企圖を同じふするい實に容易の業にあらず「ジョーエ」曰く既に既往に屬したる者い其の善惡に拘いらず言葉を費やすは無益なり最早此の事を云ひ玉ふな邊兒月孫氏哂つて曰く汝の云ふ所甚はだ理あり然れども只だ其の後の話說を聞かんとを願ふ「ジョーエ」曰く暫らく待ち玉へ我れ此の肥雁を料理し果てゝ然る後寬々御話し申す可し邊兒月孫氏曰く只汝の好む所に任せん「ジョーエ」曰く今や阿弗利加の鳥肉いよく歐人の腹に適するや否やを試ろみる可し

斯て雁肉を炙り終りて皆々共に之を喰ふに「ジョーエ」い數日間斷食せし人の如く齒を打ち鳴らして喰ひけり

夫より茶及び淡酒を飲み了りて「ジョーエ」い其の身の話說を語り始めけるに艱難困苦の其の間にも嘗て主人の事を忘れざりしと言語の間に顯いれければ邊兒月孫氏い大いに感激し屢々「ジョーエ」の手を握りて其の喜びを表しけり邊兒月孫氏又「ジョーエ」に向ひて「ビヂチマス」嘲の消滅せし道理を語りければ「ジョーエ」も始めて疑がひを晴しぬ

斯て「ジョーエ」其の身の話說を語り續け黑夜沼の中に陷入りたる段に至り覺えず大聲に獸じて曰く其の時に至りてい最早助かるまじと思ひ只管御身の事を思ひ遣りて猶ほも泥中を動き廻るうち二歩計り距てたる處に新たに切りたりと覺しき一條の綱を認めしかば辛くして其の側に這ひ寄り手に取りて之を曳くに重くして動かざれば之を力に進み行き其の端に至り見れば即ぱち一箇の錨なり目を注てよく〳〵見るに豈に料らんや是れ「ピクトリヤ」号の錨ならんとは是に於て御身

等の此の所に繫り居たるとを知り少しくは力を得て彼の錨を足代と爲し幸くして深泥の中を出るとを得たり

此時勇氣稍や元とに復しければ足を早めて此の所を立去り夜の中に十數里の道を歩行みて翌の朝に至り一の大林に來りけるに柵を結び廻して其の内に數疋の馬を放ちたり是に於て我は暫らくも猶豫せず一疋の馬に飛乘りて只管北の方を志ざし市街を避け村落を廻りて成る可く人目に掛らぬ用心を爲し百花の爛熳たる廣野を過ぎ灌木の垣を飛び超へて頻りに馬を進むる程に忽ち植物の界を越へ砂漠の中に來りたり這は前後を見るに便よくして素より望める所なれば馬を馳せて「ピクトリヤ」号を見んと欲すれども絶えて影だに見ると能はず斯て三時間可り經る所に思ひも掛けず亞良比亞人の野陣を張るに出遭ふたり其の時我が驚きは實に名狀す可からず「ケチヂー」君よ獵者一

「ピクトリヤ」号林中ニテ火責ニ遭フ圖

旦自から狩らるゝにあらずんば眞に狩の何たるを悟らず倘し我が忠告を諾し玉ふとならば決して狩を爲し玉ふとなかれ其の狩らるゝ者の身に取りては其苦しみ云ふ可らず此の時我が馬は長途に疲れて其の所に倒れしかば餘義なく徒行立となりて此の所を遁げ去らんと爲せしに忽ち彼等の目に注りて先きに御身の見玉ひし如く既に彼等の毒手に罹らんとせり然るに御身等天外より下り圖らず我を助け玉ふ是に於てか益々我が御身に依賴せしとの空ならざりしを知る以後斯くの如き危險い御身等を益するにあらずんば決して冒さゞる可し然れども先きにも云へる如く今更ら喋々するとも益なきとなれば最早其の可否を論じ玉ふな邊兒月孫氏「ジョーエ」の話しを聞き了りて曰く我が勇猛なる「ジョーエ」よ我れ先きに汝の音信んことを期したりしが果して誤まりにいあらざりし

「ジョーエ」が話説の中に氣球い長路を進行し遙か向ひに當りて一群の小屋を望みたりしかば「ケチヂー」氏指さして何國ぞと問ふ邊兒月孫氏地圖を披いて其の位置を察するに是即いち「ダメルグー」國の小都會「タゲレル」なり

邊兒月孫氏曰く今我儕い再たび「パース」氏の道に來れり氏い此の所にて二友「リチヤードソン」「ヰルグ」兩氏に別れたり「リチヤードソン」氏い「ジンダア」を志ざし「チバーウエグ」氏い「マラヂ」に向ひたりしが共に邊土の煙と消へ歐州に歸りたりしい只だ「パース」氏一人なり「ケチヂー」氏曰く然れども今ま氣球の針路を察するに全たく北方に向ひたるものゝ如し邊兒月孫氏曰く如何にも北方に向ひたり「ケチヂー」氏曰く御身い夫にても惡からずと思ひ玉ふか邊兒月孫氏問ふて曰く如何おれば北方の進行を嫌忌するか「ケチヂー」氏曰く倘し此の方向を續け

ゝば終にい大砂漠を横切て「ックポリ」國に達す可し邊兒月孫氏曰く我儕い決して左程遠方に航するの憂ひなし「ケチヂー」氏曰く然らい何處に止まらんと欲するヤ邊兒月孫氏曰く我れ「チンブクツー」に至らんと欲す「ケチヂー」氏曰く實に然るか「ジョーエ」曰く遙々阿非利加にまで來りながら「チンブクツー」を見ざるときい是れ眞の旅行と云ひ難し邊兒月孫氏曰く御身若し彼所に至らゝば歐人にて彼所を見舞ひたる十五六番目なる可し「ケチヂー」氏曰く然らゝば早く其の所に至る可し邊兒月孫氏曰く必らず急ぎ玉ふな東經十七八度に達せし時東方の順風を待ちて然る後至るとを得可し「ケチヂー」氏曰く今より北方に向ひ猶ほ幾何の道を進む可きか邊兒月孫氏曰く少くとも百五十英里可りなり「ケチヂー」氏曰く然らい我れ暫らく眠らんと欲す邊兒月孫氏曰く我れ御身をして永く張番を爲さしめたり心置なく眠り玉へ

「ケテヂー」氏是に於て眠りに就きけれバ邊兒月孫氏い其の座を保ち四方に眼を配り居たり

「ビクトリヤ」號は正さに急風に乘じたるとあれば其の進行甚はだ速やかにして僅か三時間を經る程に層巒嵯峨たる山國を超過し遙かに下方を望み見れば「アカシアス」樹「シモサス」樹月日木等鬱々蒼々として其の間豹駝、羚羊、駝鳥等數多の駈け廻れり夫より曠漠たる砂磧を過ぎ再たび植物の界に入りたり

今ま旅客の入り込みたる地は「ケイルーアス」人の國にして此地の住民は皆な綿を以て其の顏を掩ふの風習あり

斯て夜の十時に及びけるに月光隈なく照り輝やきければ乘輿に取付きて下方を望み見るに半ば頽破したる一箇の市街なり所々に殿堂の尖塔を望む邊兒月孫氏は之を見て是れぞ「アガデス」の市街にして一時

は商賈繁昌の土地なりしが今は全たく衰微したる由を語れり

「ビクトリヤ」號は二百五十英里可りの長旅を爲し「アガデス」より二英里を隔てたる黍畑の中に下りしが風位東方に變じければ此の機失あふ可からずとて邊兒月孫氏は再たび氣球を昇騰せしめ日の出るを合圖として又もや急風に乘じたり

第三十一回　梨星光旅砂漠　犧人命究河原

五月十七日は「ビクトリヤ」號終日西南に向つて飛び少しも方向を變ずるとなし此の邊は地皆な平坦にして海面より高きと一千八百尺バかり土人い猛惡なる「ツーアレグス」人なれバ邊兒月孫氏い其の降下の危險なるとを覺り出發の前既に飲水を取り換へたり

此の日「ジョーエ」い食肉を料理し盡し既に夜に入りけれども月光晝の如く明らかあれバ邊兒月孫氏い暫らくも氣球の進行を止めず夜中に

六十英里餘を旅せしが氣球殊の外穩やかにて赤子の睡りをも覺さじと思ふばかりなりし

斯て翌の朝に至り風位少しく變じて氣球の進行西北に向ひたり空中には烏鵲東西に飛び違ひ遙か彼方に鷲鳥の一群を望みたりしが幸ひにして氣球には近寄らざりし

「ジョーエ」彼の鷲鳥を望み見て先きの鳥害を思ひ出し氣球を破りたることを悔みて曰く今我儕は單に一箇の氣球を有つのみにて恰かも船に屬きたる長船の如く甚はだ心根なし邊兒月孫氏曰く實に然り然れども我は船と共に長船を好まず「ケチヂー」氏曰く汗は何んと云ふとゞやゝ邊兒月孫氏曰く今ま此の新「ピクトリヤ」号は元の「ピクトリヤ」号に較ぶるときは其の價格甚はだ劣りたり如何となれば餘程球中の瓦斯を失なひしと見えて我儕は漸次降下の姿あり故に上方に止まらんと欲せ

ば猶ほ水素瓦斯を膨張せざる可からず「ケチヂー」氏曰く御身は如何して此の損害を修繕するとを得る歟邊兒月孫氏曰く今我儕は非常に進行を急ぎ夜陰も猶ほ停止せず只管道を急ぐ最中なれば之れを修繕するとは難し「ジョーエ」曰く我儕は猶ほ遠く進まざる可からざるか邊兒月孫氏曰く我れ奈何にして其の何所に停まるかを語り得可き只風勢の如何に任せんのみ然れども「チンブクツー」は此より猶ほ四百英里を距てたり「ジョーエ」曰く我儕の其の所に達するは大凡ろ何日頃なるゾ邊兒月孫氏曰く今日は日曜日なるを以て風力倘し減殺せざれば火曜日の晩に能く達するとを得可し「ジョーエ」人獸の一群を指ざして曰く我儕は彼の隊商の前に降下せば如何

「ケチヂー」邊兒月孫の兩氏は「ジョーエ」の言葉を聞て共に其の方を望み見るに大凡ろ百五十頭可りの駱駝あり這は「チンブクツー」より「タフヒ

レット」に至る駄賃駱駝にして各五百磅の重量を負ひ賃錢は僅かに五弗に過ぎず

「ツーアレグス」國の駱駝は世界中無比の良種にして三日より七日の間は一滴の水を飲むとあく二日の間は一物を食するとあくして能く其の生を保ち且つ馬よりは速やかにして殊の外柔順なれば土人は之を「メハリ」と呼びて大いに珍重すると云ふ

此の隊商の中には婦人小兒立混りてごろ〳〵動く石の上荊棘の生へ廣がりたる砂漠の中を辛くも歩行みゆきければ强風時々砂を吹いて旅客の面を拂ひたり

「ジョーエ」之れを見て問ふて曰く旦那よ亞良比亞人は斯る曠漠たる砂漠中に來り如何にして途を覓め且つ所々に散在したる井泉を見出すことを得るやらん甚はだ怪しむ可し邊兒月孫氏答へて曰く彼の亞良比亞人等は天性として不測にも途を知るの別智を備へたり倘し歐羅巴人ならしめば必らず途を誤まる所にても彼等は決して猶豫せず正しき道を覓め行くなり細微の石極少の砂一幹の草砂漠の色等を見て彼等は能く其の道を尋ね然して夜に在りては星の光をもて案と爲す其の旅行の速力は一時間平均二英里にして日中は暫らく休憩を爲すと雖ども九百英里の長路を旅するとなれば隨分彼等に取りては至難の事と云ふ可し

兎角するうちに隊商は遙か後邊の雲間に隱れ既に夜に入りけれども月光同じく明らかなれば須臾くも其の進行を止めず終夜急風に乘じたり

次日は月曜日に當りけるが朝より一天搔き曇りて雨は盆を覆すが如く降りしきりければ氣球乘興とも大いに其の重量を增しければ常に

竈の火を絶つと能はず下方には泥沼小流數多く所々に散在し「ミモマス」「パチバブス」及び「タマリンヅ」等の植物鬱生したり此の國は「ソンレイ」國にして傾斜の屋根を備へたる人家所々に群を做し周圍には小丘相繞つて小湖小池最も多く「ピンクド」「鳥の名」の類其の水邊に群れ居たり又た所々に數條の急流あり土人之を渡るには互ひに手に手を繋ぎ合せて両端の者は岸上の樹に緊と取り付き以て流溺の憂ひを逃るゝと云ふ夫より數箇の森林を過ぎ行くに鱷魚河馬犀等の群れ居ると最も夥たゝし

邊兒月孫氏曰く今暫らくせば有名なる「ナイガル」河を見ることを得可し都べて大河の涯に來るときは國土の形容大いに變ずるものなり此の河流あるが爲めに沿岸の地は草木繁り終には之れが爲めに開明に赴むくならん此の「ナイガル」河は其の長さ二千五百英里に渉り両岸には

阿非利加にて緊要なる都會少なからず

日中に至りて一時は繁盛を極めたりしも今は大いに衰微したる「ガチ」の小都會を過ぎ氣、球は早や「ナイガル」河の水上に來りたり

邊兒月孫氏曰く見よ〳〵彼の河は即はち「ナイル」河の匹敵にして有名なる「ナイガル」河なり此の河も「ナイル」河と同じく久しく地理學者の胸裡に入らず之れを發見せんとして幾多の人命を害せしや知る可からず旅客は興端に俯して彼の河を望み見るに水勢甚はだ急にして河幅も亦狹隘ならず左れども氣、球の進行甚はだ神速なりしかば委しく之れを見るの暇なし

邊兒月孫氏曰く我彼の河に就いて御身等に語り聞せんと思ひたりしに早遠く隔たりたり抑も此の河は所に依つて其の名を異にし「ヂウレバ」「マヨ」「エッキレウ」「クォーラ」等其の他猶ほ數稱あり然れども其の義は皆河

と云ふに外ならず其の長さに於ては殆んと「ナイル」河に相譲らず「ケチジー」氏曰く「ナイガル」河の水源は既に發見せられたる歟邊兒月孫氏点頭いて曰く其の水源は久しき以前より早く世に知られたり本流及ひ支流の發見に就いては種々の話説ありと雖ども只其の重なるものをのみ語る可し一千七百四十九年より同し五十八年に至る間に「アダムソン」氏此の河流を發見し「ゴリー」國を見舞ひたり一千七百八十五年より同じ八十八年に至るの間に「ゴルベリー」氏「セヂガムビヤ」の砂漠を試驗し夫れを横切て終に「ムール」人の國に至りたり此の種族は最も猛惡なる性を備へたる者にて「サーニー」「ブリッソン」「アダムス」「リレー」等の數氏は皆な其の毒手に命を隕せり次には蘇格蘭人「マンゴー、パーク」氏にして此人は一千七百九十五年龍動なる亞非利加協會より派遣され「バムバラ」國に達して「ナイガル」河を望み奴隷商人と共に五百英里の長

旅をなし「ガムビヤ」河を發見して一千七百九十七年再たび英國に歸り來れり一千八百五年の一日に至り氏は又た英國を出發して再たび阿非利加内地に入り其の年の八月「ナイガル」河に達したりしが此の間同行四十人の内二十九人の多數を失なひたり氏が最後の書簡は其の年の十一月に書れしが其の後は絶えて音信を聞かず或る土着商人の云へるには同年十二月二十三日氏が乗りたる小舟不幸にも顚覆の害に遭ひ氏い土人の爲めに殺されたりと云「ケチヂー」氏曰く其の後探討い全たく廢止に歸したるか邊兒月孫氏曰く否々之れが爲めに益々熱心家の心を激し河流の探討功を奏せしのみならず「パーク」氏が手書も亦た世に顯はるゝに至れり初め一千八百十六年「グレイ」氏探討の任を帶び阿非利加内地に進入せし後ち一千八百二十二年「レイング」氏阿非利加内地に入り「ナイガル」河を溯りて其の水源を極めたり其の所に至り

て い河幅僅か二尺に減じたりと云ふ「ジョーエ」曰く然るときい容易く跳越ゆるとを得るなり邊兒月孫氏曰く實に然り然れども土人相傳ふ若し人ありて此の河を跳び越えんとなすときい直ちに水中に吸ひ込まれ或ひい其の水を汲むとあらば何者とも知れず其の水を引戻すとぞ「ジョーエ」曰く我れい之れを信ずると能いず邊兒月孫氏曰く信ずると否とい只汝の好む所に任せん斯て「レインジ」氏い其後五年を經て「チンブクツー」にまで歸り來りしが其の國王の爲めに回々教に改たむ可き由說き勸められしが氏い堅く執つて從がいざりしかば終に國王の命にて絞め殺されたり「ケチヂー」氏曰く其の慘酷なる實に驚くに堪えたり邊兒月孫氏曰く「レインジ」氏の外「チンブクツー」にまで入り込みたる旅人猶ほ二人あり即いち「ケイリエ」「クラッパートン」の兩氏なり「ケイリエ」氏い一千八百二十八年彼の地に至り大いに其の地理を明らめたり「クラッパートン」氏は「サッカッツー」に至りて終に死去し其の僕「リチヤード、ランダア」と云へる者猶ほ探討に盡力せしが憫れむ可し終に土民の爲めに銃殺せられたり是に於て御身等此國に入込みたる數多の勇猛なる探討者ありしと雖ども其の褒賞い何時も一死なりしとを知覺せしならん

第三十二回　奇峯凸兀聳月明　鍾斯群飛掩日光

此日は雨の憂あるのみならず風位稍東北に變じて氣球は「チンブクツー」の緯度を超へしかば邊兒月孫氏は大いに心を痛めたり「ナイガル」河は「チンブクツー」に至りて大いなる角度を作り一大河となりて太西洋に注ぎたり此の角度の中に挾まりたる國土は其の差等常ならず此所に豊饒なる田野あれば彼所に荒蕪の廣原あり或る時は灌木の廣野を過ぎ或る時は數多の河湖を望みて鵜鶘鴨魚狗など云へる

水鳥群れ居たり又た所々に「ツーアレグ」人の野陣を張るを見る男は天幕の蔭にて駱駝の乳を絞り或ひは煙草を吸ふあり婦人は其の中に在りて應分の仕事を爲す

午後八時頃に至り「ピクトリヤ」号は西方二百英里餘を航し遙かに向ひを望めば「ホムボリ」山高く月明の下に聳えたりしが其の形の奇怪なること宛かも古代市街の零落を見るが如く又た氷海の浮氷を望むに異あらず此時風位東南に變じ氣球を吸いて其の望みたる方に進めけり

斯て二十日に至り氣球より俯して下方を望めば「ナイガル」河の支流布を曳きたるが如く東西に流れ遂ひ青草鬱蒼として質に際涯なき沃野の如し「バース」氏が「チンブクツー」に至らんとて河に沿ひ下りけるとき程を發したるは此の所なりと云ふ

此時「ナイガル」河は殆んど五千尺の廣さとあり兩岸には有情花「タマリ

ンド」樹おど生ひ繁れり其の間に羚羊群を爲すあれば鱗魚外に在りて之れを狙ふ又た「ジェンテ」の商品を負ふたる驢馬駱駝の一列涼しき樹蔭を通るあり又た川の曲灣したる所に當りて數軒の低き人屋を望みたり

邊兒月孫氏喜こんで呼んで曰く彼の人家の在る所は即ぱち「カブラ」にして「チンブクツー」の市場あり市街ば僅か五英里を距てたり

夫より二時間を經る程に漸やく「チンブクツー」の市街に來にけり此の市街は昔時最も繁盛を極め「アゼンス」及び羅馬の如く學校ありて學士相集まり理學も甚はだ盛んなりしと云ふ

邊兒月孫氏「バース」氏が地圖を取出して此の市街と引合せ見るに甚はだ確實を覺えたり市街の形は三角にして白砂曠原の中に在り其の周圍に生長したるものは草矮樹及び荊棘のみ他更に一物を見ず其の形

を物に比ふるときは恰も戯球及び賭賽を積み重ねたるものゝ如し人屋は皆床を設けず或ひは圓錐なるあり或ひは方正なるあり日光燒の煉瓦藁及び蘆葦を作れり土人は皆な鎗鉄砲等を以て身を堅め屋上或ひは平地を逍遙するを見掛けしが絶えて一人の婦人を見ず

邊兒月孫氏曰く「チンブクツー」の婦人は甚はだ美麗ありと云ひ傳ふるに得見ざるころ殘念なれ又た昔時は數多く建連ねたる殿堂も今は僅かに三ケ所を殘し宮殿石碑も其の跡を絶ち王も變じて高人となり王宮は只一商店に過ぎず榮枯盛衰の速やかなる實に歎ず可き哉「ケチザー」氏曰く見玉へ市街の墻壁は半ば押倒されたるものゝ如し邊兒月孫氏曰く彼の壁は一千八百二十六年「フーラン」人の爲めに壞られたるものなり夫迄は「チンブクツー」も猶ほ三分一大なりし然るに第十一世紀の頃より四方皆な望みを屬したりしかば興廢踵を亞いで起り或る時

は「ツーアレグ」人に屬し或る時は「ソンラエン」人に歸し夫より「モロッコー」の所領を經て遂に「フーロン」人の手に歸したり第十六世紀頃には文學最も隆盛にして「アメド、バヾ」なんど云へる學者あり又一万六百卷の寫本を有ちたる書籍館もありしが今は只中央阿非利加の一市場に過ぎず

實に邊兒月孫氏が言葉の如く昔い隆盛を極めたる亂會と覺しく所々に墟趾舊跡を殘し昔時の市場と覺しき所い僅かに一小丘を爲したるのみ見る影もおき有樣なり

斯て土人い「ビクトリヤ」號を認むるや否や其の騷擾一方ならず太鼓を打ちて人を集むる樣なりしが風位又た變じて再たび河流を下りけれバ「チンブイツー」い早見えずなりぬ

邊兒月孫氏氣球の方向を見て曰く天は我儕を導いて其の欲する所に

連れ行く可し「ケチヂー」氏曰く西方だけハ御免を蒙りたし「ジョーエ」曰く我れハ少しも其の方向を顧りみず假令ひ大洋を横切つて阿米利加に達するとも或ひハ踵を回らして「ザンジバル」に還るとも我ハ決して意に介せず邊兒月孫氏曰く汝の云ふ所ハ空論の稱を免かれず「ジョーエ」曰く何故にて候ふぞ邊兒月孫氏曰く瓦斯の欠乏これなり我が氣球ハ次第に浮揚力を失ふ有樣なれバ勉めて西方の進行を避けざる可からず「ケチヂー」氏曰く我儕が旅行の完結するも猶ほ未だ遠かるに御身ハ何國の海岸に降下せんと思ひ玉ふぞ邊兒月孫氏曰く我れ甚ハだ其の答へに惑ふ然れども「シルラ、レチン」と「ポルテンヂック」の間なる海岸に達するとを得バ大いに幸福ならんと思ふなり如何んとあれバ彼の邊にハ多分親友に出遭ふとある可し「ケチヂー」氏曰く我れ若し一親友と握手するとを得バ此の上の幸なしと雖ども今我儕ハ正當の針路

を取りたるか邊兒月孫氏曰く否全たく正當の針路とハ云ひ難し試ろみに磁器を見よ氣球ハ將さに南方に進み「ナイガル」河の水源を突んとせり

「ピクトリア」號ハ次第に浮揚力を失なふの有樣あれバ砂重を悉ごとく投ぜしと雖ども竈の火ハ少しも減ずると能ハず最後の度を保ちたり時に「ピクトリヤ」号ハ「チンブクツー」を距ること南方凡そ六十英里翌日ハ「デボ」湖に達するならんと邊兒月孫氏ハ語りたり

「ピクトリヤ」号ハ北方の急風に乘じ南を投して行く程に「ナイガル」河ハ數箇の大嶋の爲めに其の流れを分割され水勢尤も急なり嶋中にハ獵者の小屋の如きもの見えしと雖ども氣球の進行迅速なれバ之れを熟視するの暇なく益す南方を投して行く程に遂に「デボ」湖に達したり邊兒月孫氏ハ瓦斯を膨張せしめて異方の風を待ちしといへども只瓦

斯を失なふのみにて浮揚力い次第に減ずる有様なれバ餘義なく竈の火を滅じて地上近く下りしが風い猶ほ南方にのみ吹きけれバ邊兒月孫氏い大いに胸を痛め獨り心中に思へらく我儕若し英國或ひい佛國の殖民地に達すると能いず「ギニア」海岸の如き野蠻人の巣穴に至ると きい果して如何の運に遭遇すべき歟如何んぞ船に乘じて英國に歸ることを得ん今風の方向に依て考がふるときい我儕い將さに「ダホメー」國に至らんとせり聞く此の國の土人い亞弗利加中最も猛惡なる蠻民にして祝日にい國王の命に依り數千の生靈を虐殺するが如き慘酷無雙の風習ありとか我儕若し其の國に至らバ如何んぞ生を全たふするを得ん其の上氣、球い日々に浮揚力を失なふて最早我儕を支ふると能いざるの有様なり實に進退谷まりたりと然るに天氣少しく快晴に赴むきけれバ邊兒月孫氏い万一風位の變更せんことを希望せり

「ジョーエ」一朶の雲を望みて曰く彼の雲の摸樣を以て察するに我儕の位置い甚はだ宜しからず邊兒月孫氏曰く彼の雲い今まであり たるものとい自づから異なれり「ケヂヂー」氏曰く其の上實に大いなる雲と云ふ可し「ジョーエ」曰く我未だ嘗て此の如き雲を見たることなし所謂垂天の雲なる可し邊兒月孫氏眼鏡を下に置いて曰く彼の物は雲の如く見ゆると雖ども其の實は雲にあらず「ケヂヂー」氏問ふて曰く然らば果して如何なる物ぞ邊兒月孫氏答へて曰く即はち蝨斯の群飛するものなり「ケヂヂー」氏驚いて曰く實に然る歟邊兒月孫氏曰く此の國は蝨斯甚はだ多くして其の數幾千万億と云ふを知らず其の群飛するときは恰かも大旋風に異ならず其の害實に甚はだし「ジョーエ」曰く我は早く見んとを欲す邊兒月孫氏曰く「ジョーエ」よ暫らく待つ可し今十分を經過せば氣、球彼の群蟲に達す可きに其の時曲さに見ることを得ん

果して邊兒月孫氏の言葉に違はず近付くまゝに彼の簇雲と見えし物を望み見れば實に蝨斯の群飛するものにして其の羽音頗ぶる喧びすしく殆んど天日を離隔して恰かも日蝕に異ならず三人の旅行者は奇異の思ひを爲して飛び行く方を望み居しに彼の群蟲は氣球より百歩ばかり隔てたる一箇の青々たる村落に飛び降り十五分ばかり過ぎて再たび遠く飛去りしかば如何爲せしかと望み見るに樹とも云はず草とも云はず苟しくも蒼色を帶びたる物は皆な悉ごとく喰ひ盡し俄かに冬の來りしかと怪しまる

「ケチヂー」氏曰く彼の蝨斯の害は雹よりも一層甚はだし邊兒月孫氏曰く彼の蟲害は避けんとするも其の術なし或時は土人之を追はんが爲めに森林或ひは草野を燒き拂ふとあれども群蟲の一部分火中に役じて之を滅し殘餘の分再たび害を爲す故に到底之れを避くること難し只

だ之れが爲め得る所の利益は土人彼の蟲を多く捕獲して食料に供するに過ぎず「ジョーエ」曰く彼の蟲は空中の小海老とも云つ可し我れは其の味を試みんとを欲す

斯て暮に及ひけるに土地多くは泥沼多く森林は早晩跡を絶ちて寒木の所々に兀立するあるのみ然れども河畔には煙草の畑及び沃野等少なからず「ジェンチ」の市街は一大嶋の中に在り市中所々に二塔を備へたる殿堂あり墻壁の周圍には燕鳥の巣群を爲し臭氣紛々鼻を襲ふ此地に繁茂したる樹木は「バチバブス」樹「ミモサス」樹月日樹等にして所々に枝を交えたり此の「ジェンチ」と云へるは純然たる一商市にして「チンブクツー」の欠亡を補なひ頗ぶる繁盛にして夜陰と云へども甚はだ雜鬧を極む河には小舟東西に漕ぎ違へ隊商續々駱駝を曳いて土地の産物を運搬す

邊兒月孫氏曰く我儕倘し行手を急がぬ旅なれば暫らく此の市街に降下なし多分英國或ひは佛國に往來して少しは輕氣球の理をも辨まへたる亞亘比亞人に遭ふとを得可し然しなから此も亦た甚はだ怪愼なる仕方とは云ひ難し「ジョーエ」哂つて曰く汝は又次の旅行に讓る可し邊兒月孫氏曰く且つ風位東方に變じたれば此の好機を失なふは甚はだ愚なるに似たり

然るに氣球の浮揚力は次第に減殺する容子なれば邊兒月孫氏は空壕及び古き肉入など要なき物は悉ごとく放出し辛く相當の位置を保ちて西風に乗じ進行せり

四時に至りて「バムバラ」の首府「セゴー」を望みぬ此首府は全府を四街に分ちて殿堂所々に散見し又た土人の小舟に乗じて河上を漕ぎ廻るを見る然れども氣球の進行甚はだ速やかにして曲さに之を望むの暇なし

此の時氣球の針路は稍北西に轉じたり邊兒月孫氏曰く今より猶ほ二日を經過せば我儕い「セネガル」河に達するとを得可し「ケネディー」氏問ふて曰く我儕い其の所に於て親友と稱す可き人に逢ふとを得るか邊兒月孫氏答へて曰く否な全たく親友の國といい稱し難し「ビクトリア」号倘し途中に於て其の勢力を失なふとあらば我儕い彼の河に沿ふたる佛國の殖民地に至るとを得ん之に反して氣球幸いひに百英里以上を旅行するの力を保ちたらんにい我儕い毫も危險の憂ひなく容易く海岸に達するとを得可し「ジョーエ」曰く然るときい我儕が旅行も將さに完結を告るなり然れども世人若し我儕が旅行を疑がふ時い如何邊兒月孫氏曰く我儕が出發い既てに世人の注目する所となれり如何んぞ我儕が歸着の日を待たざるとあらん「ケネディー」氏曰く其の時に及び誰か

我儕の旅行を疑がひ大陸を横切せざりしと云ふ者あらんや「ジョーユ」嘆息して曰く先きに我が拾ひ取りたる彼の金鑛の一二塊を持來りしならば彼等をして我儕が一言片語をも信ぜしむ可きものを實に遺憾極まりなしと云ふ可し

第三十三回　失揚力旅客投什器　冒危險氣球踰高山

五月二十七日の午前九時に至り氣球い忽まち一山の前に來れり此の山脈い「ナイガル」河と「セテガル」河を相分ち「ギニア」灣と「ケイプ、バード」港との間だに挾まりたるものなれば是非とも横切せざるを得ず

阿非利加の此の部分い最も猛惡暴獰なる蠻民の住居ふ所にして從來旅客の命を隕せし者其の幾十人なるを知らず「マンゴー、パーニ」氏が多く同行者を失なひしも亦此の國なりと云ふ邊兒月孫氏い能く此等の事を知るが故に決して此の國に降下せざる可しと決したり去れども

「ビクトリヤ」号い次第に低落の姿を顯いしければ邊兒月孫氏い心も心ならず須臾の間も息を休めず如何にもして此の山上を經過せんと現時不用なる物品は皆な悉ごとく輿外に投じ漸くにして山上を超過し凡そ百二十英里餘を進みしが氣球い次第に收縮して時々風の爲めに凹所を生じたり

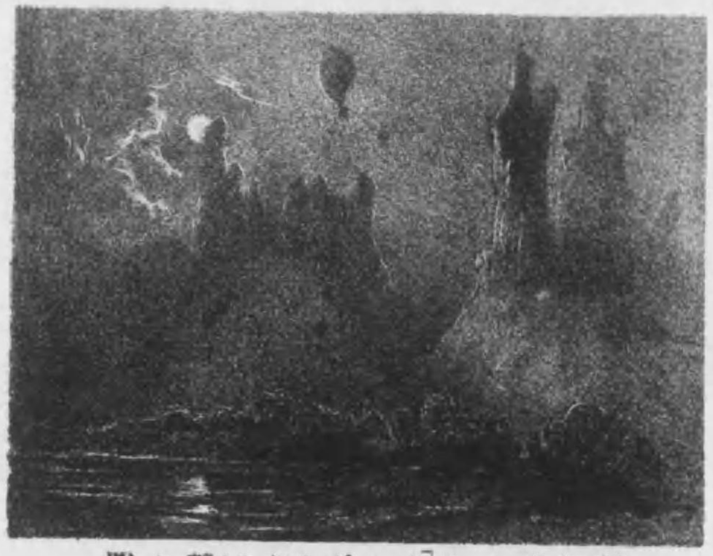
「ケチヂー」氏問ふに曰く氣球に若しや穴の生じたるにいあらざるか邊兒月孫氏曰く否々多分氣球の上に塗りたる電槽の日光の爲めに溶解せしが爲め球中の瓦斯かくい洩出せしならん「ケチヂー」氏曰く我儕い如何して之を防ぐことを得るか邊兒月孫氏曰く只輿中の物件を投じて重量を減ずるの外致し方なし「ケチヂー」氏輿中を見廻して曰く然して御身い何を投ぜんと思ひ玉ふや邊兒月孫氏曰く我儕が第一着に投ず可きい天幕なり此い非常の重量を有てり

「ジョーエ」是に於て綱を攀ぢ難なく天幕を解き下して之れを輿外に投じたり

「ジョーエ」曰く此の天幕を以て千人の蠻民等ハ各々其の衣服を製するとを得可し彼等の中にハ織物甚ハだ乏しからん

是に於て「ピクトリヤ」号ハ少しく昇騰なしたりしが暫らくして再たび地上に近づきたり

「ケチヂー」氏曰く一先づ地上に下りて蓋絹の模様を察せば如何邊兒月孫氏曰く开ハ前にも屢々云へる如く到底徒勞に過ぎざるなり我ハ嘗て之れを修繕するの術を知らず「ケチヂー」氏曰く然るときハ如何せバよからん邊兒月孫氏曰く只欠く可らざる品物の外殘らず放出するに如かず如何なる事ありとも我儕ハ斯る危險なる土地に下るとを避けざる可らず我が氣球の將さに觸れんとする彼の樹木の稍にも甚ハだ恐る可き危險あり「ケチヂー」氏曰く然して开ハ何物ぞや獅子か狼か邊兒月孫氏首部を掉て曰く否々夫より猶ほ怖る可き者なり即ハち阿非利加にて最も猛惡なる蠻民あり「ケチヂー」氏問ふて曰く御身ハ如何にして其の事を知り玉へるぞ邊兒月孫氏曰く我ハ旅客の話說に依つて能く之れを明らめたり佛人か「セチガル」地方に殖民せし以來絶えず彼の蠻人の害を蒙むりたり故に探討を爲す毎に未だ曾て戰鬪劫掠の跡を見ざるとなし「ケチヂー」氏曰く佛人か蒙むりたる害ハ如何なりしぞ邊兒月孫氏曰く我れ之を語る可し一千八百五十四年「フーラ」の一土人「アルハヂ」と云へる者馬法滅土の命を受けたりと稱し諸國の蠻族を嘯集して外夷を討伐せんと歐人に向つて兵を擧げ「セチガル」河及ひ其の支流「ファレメ」河の間なる國中を横行し人を殺し家を壞つ其の亂暴一方ならず夫より其の國を横切して益々亂暴狠藉を極め一邑一屋も之



輕氣球ヨリ「ホムボルト」山ヲ望ム圖

空中旅行者故国ニ帰着ス

を宥さず暴れに荒れて「セゴ」の市街にまで進みしが佛人之れと鋒を交へて終に彼等を打破り長驅して「セゴ子ガル」河を渉り「カールタ」國にまで逐ひ込みたり去れば彼等い今猶ほ此の近國に群居し居る可ければ迂濶に下りて彼等の毒手に罹る可からず「ジローヱ」叫んで曰く此の如くんば我儕い決して降下を爲さゞる可し「ビクトリヤ」號をして相當の位置を保たしめん爲めにい穿きたる靴をも投ず可し

邊兒月孫氏曰く氣球い既に河に近付きたりと雖ども恐らくい之を超過すると遮ふまじ「ケチジー」氏曰く如何にもして河畔に至らんとを勉む可し然るときい又た如何なる幸を得るやも料り難し邊兒月孫氏曰く汗い素より勉めざる可らざるとなれども一事の之れを妨ぐるものあり「ケチヂー」氏曰く汗い又何ぞや邊兒月孫氏曰く我儕河畔に達せざる前に一山を横切せざる可らず然るに球中の瓦斯を最熱の度に達せ

しむるとも到底十分なる浮揚力を生じ難し「ケチヂー」氏曰く暫らく待つて其の模様を見る可し「ジョーエ」曰く我が「ビクトリヤ」号を愛すると丶水夫が船に於けるが如く相別れる丶實に忍びざるなり邊兒月孫氏曰く必らず心を費やすとなかれ我儕が氣球を見棄つる丶力拯ふと能丶ざれバなり我丶今より二十四時間を保たんとを望む「ジョーエ」上方を望んで曰く氣球丶次第に退縮して將に死に垂んとせり實に憫れなる氣球なる哉

「ケチヂー」氏遠方を指さし示して曰く見玉へ彼所に一列の連山あり邊兒月孫氏眼鏡を執つて望んで曰く如何にも山あり且つ甚いだ高く聳えたり我儕丶如何して彼の山上を超過す可き歟「ケチヂー」氏曰く我儕丶彼の山を迂廻すると能丶ざるか邊兒月孫氏曰く我丶其の難きとを知る見よ山脈の長く連なりたるを「ジョーエ」曰く彼の山脈丶恰かも吾

倩の周圍を取卷きたるものゝ如し「ケチヂー」氏曰く然らば到底超過せざるを得ず邊兒月孫氏曰く僅かに一日の飲料のみを殘して水槽を悉ごとく放出す可し「ジョーエ」曰く皆な放出し了りたり

「ケチヂー」怪しんで曰く氣球い昇騰しつゝある歟邊兒月孫氏曰く甚い だ微なり僅かに五十尺に過ぎず之にてい猶ほ十分ならず

兎角するうちに氣球い山の端近く來りけるが高峯高く聳えて旅客の頭上に落蔽らんとするの勢ひを顯いし之れを超過せんにい是非とも猶ほ五百尺を昇騰せざる可らず是に於て竈の内なる水い僅々數「ピンド」を殘し置きて餘い悉ごとく放出せり

邊兒月孫氏曰く猶ほ未だし「ケチヂー」氏曰く箱い皆な空虛になりたれば若し悉とく放出す可きか邊兒月孫氏曰く猶ほ未だし「ジョーエ」曰く我い一分毎に物品の消え行くを見るに忍びず邊兒月孫氏曰く「ジョー

エ」よ汝又た過日の如き突飛の所行を爲し以て我儕を苦しむ可らず「ジョーエ」曰く決して心配し玉ふな我儕は必らず相ひ離れざる可し

「ピクトリヤ」号は更らに二十尺の昇騰を爲せしと雖ども山は猶ほ頭上高く聳え行手には直立二百尺ばかりの岩壁あり

邊兒月孫氏曰く氣球若し昇騰するを得ざるときは十分間にして彼の巖石に衝突し忽ち碎碎とならん興中の食料は「ベムミカン」を除いて餘は悉ごとく放下す可し

「ジョーエ」は命を受けて凡そ五十磅の食料を投じければ氣球少しく昇騰せしと雖ども未だ山巔に達すると能はず然るに「ピクトリヤ」号の進行は將さに迅速を極めたれば今にも巖石に衝突するの姿を顯はし其の危險云ふ可りなし

邊兒月孫氏興中を見廻しけれども最早投ず可きの品物なし是に於て

「ケチヂー」氏に云つて曰く倘し已むを得ざるの場合に至る時は武器を放出するの決心を做し玉へ「ケチヂー」氏叫んで曰く吾が銃を棄てよと云ひ玉ふか邊兒月孫氏曰く我が御身に願ふ所以は萬已むを得ざれはなり「ケチヂー」氏曰く我能く御身の意を了解せり邊兒月孫氏曰く御身の銃火藥及び早合は實に我儕三人が生命と相匹敵せり「ジョーエ」叫んで曰く彌々近寄りて候ゞ猶ほ三十尺を昇騰せざる可からず「ジョーエ」毛氈を取つて悉ごとく放出しければ「ケチヂー」氏は默然として彈丸火藥を投じたり是に於て氣球稍昇騰し殆んど超過す可からしが乘輿は猶ほ岩の下に在りて今や微塵にならんとせり

邊兒月孫氏叫んで曰く「ケチヂー」君よ早く其の銃を投じ玉へ然らざれば我儕は此所に命を終る可し「ケチヂー」氏之を聞て既に銃を投ぜんとなしければ「ジョーエ」之を止めて曰く暫らく待ち玉へ我れ自から詮術

ありと云ひつゝ姿を隱しければ「ケチヂー」氏は見て大いに驚ろき偖は又身を投じたるかと思ひ「ジョーエ」〳〵と呼ひけれども絶えて其の答を聞かず邊兒月孫氏も之を見て愀然として首を垂れ不幸なる者よと嗟やきぬ

此の山巔は廣さは大凡ろ二十尺可り向ふの側には小坂あり氣球は辛くして超え行く程に乘輿の底は巖石と相觸れ其の危ふきと云ふ可りなし

此時乘輿の下に當りて我儕は漸やく山を超えて候ゞ心を安んじ玉へと叫ぶ者ありこれ即はち「ジョーエ」なり邊兒月孫氏之を聞て大いに喜こび何所に居るかと望み見れば彼の剛勇なる若者は乘輿の底部に聢と取付き山巔の上を走り居たり去れども「ジョーエ」が身体の重量を減ぜしが爲めに氣球は稍や昇騰するの勢なれば「ジョーエ」は力を極めて

之を支へ已に山の向ふ側に至りて深谷前を遮ぎりければ身を跳らして綱に取り付き難なく興中に還りけり

「ジョーエ」曰く此の如き事を爲すには我れ少しも勞を覺えず邊兒月孫氏「ジョーエ」の背を撫して曰く我が勇猛なる「ジョーエ」よ汝は實に我儕の益友なり「ジョーエ」笑つて曰く旦那よ此度は御身の爲めに爲せしにはあらず即はち「ケチヂー」氏が銃の爲めに働らきしなり我れ先きに亞良比亞人の難に遭ひし時彼には厚く恩を蒙むれり我れ「ケチヂー」氏が銃を棄るを見るに忍びず故に少しく手足を働らかしたり

「ケチヂー」氏之を聞て何の言葉もなく只手を握りて其の喜こびを表しけり

是より「ピクトリヤ」号は單に下るのみなれば少しも難きとなく地上より平均二百尺の高さを保ちて行く程に國中地震の過ぎたる跡かと思ふばかり怪石道に横たはりて大いに行路を危ぶめたり

邊兒月孫氏曰く我等は好き止り場所を見出して暫らく滯停せざる可らす「ケチヂー」氏曰く御身も終に滯停に決したる歟邊兒月孫氏曰く這は我れ進む可き方向を決定したる故なり今恰かも六時なれは猶ほ充分の時ある可し「ジョーエ」ヨ早く錨を却す可し「ジョーエ」命に從がふて二箇の錨を卸しけり

邊兒月孫氏曰く我儕は今ま可成り大いなる森の上に近づきたれは或る樹上に錨を卸す可し如何なる事情ありとも我は地上に夜を明すを肯ぜざる可し「ケチヂー」氏曰く然らは我儕は地上に下ることを得ざるか邊兒月孫氏曰く御身は何の爲めに地上に下らんとは云ふ斯る所にて相離るゝは實に危險極まりなし我が危難に遭遇したる際御身の助力にあらざれば不可なり

錨は難なく樹の稍に繫り兎角するうちに日暮れ風靜まりければ「ビクトリヤ」号は少しも動搖するとなく泰然として「シカモア」樹大林の上に在り

第三十四回　減重量旅客講進行策　拾錨氣球脱猛火圍

邊兒月孫氏星宿に依つて其の位置を考がふるに最も妥當なる場所にして「セヲガル」河より僅か二十五英里を距てたり

邊兒月孫氏曰く我儕は是非とも彼の河を横切らざる可らず然れども河上橋梁及び小舟の設けなし故に如何にもして氣球の力に依らずんばある可らず倘し之を實行せんには猶ほ一層興中の重量を減ぜずんば能はず「ケヲヂー」氏は深く銃を失ふはんとを恐れ邊兒月孫氏に謂つて曰く此より如何にして重量を減ず可きか興中投ず可き物品なし此上は一人其身を犧牲になし後に殘り留まらでい適ふまじ今度い我が順番なれば願くば此の任に當らん「ジョーエ」曰く御身寶に之を爲さんと欲するか想ふに斯る事い我れ御身に勝りたるあらん「ケヲヂー」氏曰く我い汝の如く跳んと欲するにいあらず歩行にて阿非利加の海岸に至らんと欲するなり歩行くとに於ていい我れ甚いだ他人に讓らず「ジョーエ」曰く我い御身の發言に同意すると能いず邊兒月孫氏曰く御身如何に爭そふとも無益なり只何時までも相離る可らず「ケヲヂー」氏曰く假令ひ少しく歩行を試ろみたればとて將た如何なる害かあらん邊兒月孫氏曰く最早此に至りてい重量を減ずる最後の手段を用ゐざるを得ず「ケヲヂー」氏曰く其の手段とい果して何ぞや邊兒月孫氏曰く竈の箱「バンセン」氏の電槽及び螺旋管を投ず可し然して殘りたる重量い殆んど九百磅强なり「ケヲヂー」氏曰く竈を投じおば如何して瓦斯を膨張せしむるにや邊兒月孫氏曰く只臨機の策を用ゐざるを得ず我れ既に

精密に氣球の浮揚力を計算したり我儕三人が身体の重量ハ二箇の錨を合して五百磅にハ過ぎざる可し右の如く成すときハ十分之れを支ふるとを得可し「ケチヂー」氏曰く邊兒月孫君よ御身ぱ最も果斷なる人なり願くハ向來我儕が爲さゃる可からざる所を示し玉へ「ジョーエ」曰く我も之を願ふ邊兒月孫氏曰く他なし只だ機械を投ずるのみ

「ジョーエ」之を聞て然らバ仕事に取掛らんとて輿中の機械を片々に取離し皆な之れを輿外に投じたり其の他雜物の箱寵の箱等を取り除けんとかしけるに強く括り付けたるとなれバ中々容易に取り放し難かりしが「ケチヂー」氏ハ骨格逞しく「ジョーエ」ハ資性敏捷邊兒月孫氏ハ胸理機智を備へたれバ協力して難なく此等を取外し悉ごとく林中に投じたり

「ジョーエ」曰く靈民等若し林中に此の如き物件のあるを見出しなバ必

定驚ろき怖れて偶像と爲し禮拜するならん

次に氣球の口に通じたる管を取外さんとなしけるが這ハ頗ぶる至難なる業なりしと雖ども「ジョーエ」ハ甲斐々々しく靴を脱し綱を傳ふて高く登り行き内部の螺旋を脱して漸々に管を取り除け氣球の口ハ紐を以て緊しく括りたり

是に於て「ピクトリヤ」号ハ大いに浮揚力を增加なし錨を捨くと甚ハだ強し是の仕事を終りしハ將さに十二時なりけれバ三人ハ「ペンミカン」及び淡酒の晩餐を終りけれバ邊兒月孫氏両人に向つて曰く我れ最初に張帷を爲す可けれバ御身等ハ先づ眠りに就く可し二時に至らバ「ケチヂー」君我に代り六時に至りて「ジョーエ」の張帷を終り直ちに此の處を出發す可し明日ハ實に我儕が旅行の最後なり

邊兒月孫氏獨坐して夜を守る程に四下靜然として何の變りたるとも

なく月光時々雲間を洩れて明らかに氣球を照すあるのみ邊兒月孫氏ハ時々夜眼鏡を執て下方の林間を望ミ耳を欹だてゝ物音やすると聞き居たりしが差して變りたる模樣もなし暫らくありて林間に何やら音のなしけるよと思ひけれバ猶ほよく〳〵聞き見るに其の後い音もせで一點の火光を見たり這い不審と夜眼鏡を取り上けて彼の火光の見えしと思ふ所を望みけれども夜色深くして更らに目に遮ぎる者おし邊兒月孫氏も是に於て見違へなりしと思ひ定め差して心に止ざりしが既に「ケチジ!」の順番に至りけれバ呼醒して深く注意す可き由を告げ「ジョーエ」の側に横たハりて前後も知らず眠に就きぬ

「ケチヂー」氏ハ目を擦りながら睡魔を驅らんとて煙管を含み乘輿の片隅に坐を占めて煙突の如く吹きおがら四方に眼を配りけれども更に變りたる容子なし此時微風徐ろに來りて靜かに乘輿を搖り動かしけ

れバ「ケチヂー」氏ハ其の睡た氣なるを得も云いれず幾度か無理に眼を開いて黯黑の中を望みしが終に睡魔の鋒に當り餘ね我にもあらで眠りけり

「ケチヂー」氏ハ幾時間眠りたるか知らざれども夢の裡に怪しき音を聞きしかバ眼を擦りおがら起上り俯して下方を望まんとすれバ火氣熾んに面を撲ち林ハ一面の火と變じたり「ケチヂー」氏ハ之を見て周章狼狽大方ならず火事よ〳〵と呼ハりけれバ邊兒月孫氏「ジョーエ」も共に眠りを醒し此の有樣を見て如何なる故と云ふとを知らず只管慌れ迷ひけり

此の時下方の林間に當りて喊の聲俄かに聞えけれバ「ジョーエ」大聲に叫んで曰く偖ハ蠻民林中に火を放ちて我儕を燒殺さんと欲するに相違なし邊兒月孫氏曰く這ハ疑がふ可くもあらぬ「アルハヂ」の配下なる

「タリバス」人に相違なし

此の時火燄い益々熾んにして火光「ピクトリヤ」號の四方に迫り枯木生葉の燃る音耳を貫ぬき一望恰かも火の大洋を望むが如し「ケチヂー」氏呻んで曰く今こそ地上に飛下らざる可からず然らざれば三人此所に焚死せんと云ひつゝ飛下らんと爲せしかば邊兒月孫氏い固く之を遮ぎり止め斧を揮つて錨纜を切り放ちければ氣球い遙かに林上を離れて空中一千尺高く昇騰せしかば蠻人等い鉄砲を放つて氣球を狙撃せしかども將さに東方の順風に乘じたれば氣球い駸々として進み行きぬ時に午前四時大陽恰かも東天に昇れり

邊兒月孫氏曰く前夜倚し氣球の重量を減じ置かざりせば我儕い猛火の爲めに燒き殺さるゝ所なりし然しながら我儕い未だ全たく危難を遁れたりとい云ひ難し「ケチヂー」氏曰く氣球い御身の命令にわらざれ

ば降下するとなきに何を斯くは怖れ玉ふぞ邊兒月孫氏曰く見よ〳〵先づ彼方を見よ

「ケチヂー」氏ば指ざゝるまゝに彼方を佶と望み見れば凡そ三十騎ばかりの土民あり皆寛き股引を穿き陣羽織を着し鎗を持つ者あれば銃を携さへたる者あり皆な馬に鞭を加へて徐ろに進行すゝ「ピクトリヤ」号を追つ蒐け來り同音に喊を擧げて手に〳〵武器を振り閃めかし原野小丘の嫌ひなく一目散に馳け來る有樣なり

邊兒月孫氏曰く彼等ば必らず「アルハヂ」の配下にして猛惡なる「タリバス」人ならん彼等の毒手に罹らんよりば寧ろ林中に在りて野獸の害を待つこそ宜りし「ケチヂー」氏曰く我れば實に彼等の顏を見るとを好まず「ジローエ」曰く彼等如何に勇猛なりとも飛ぶとを能せぬば幸なり

邊兒月孫氏曰く見よ此の近邊の村落みな兵火に罹りたるをこれ皆な

彼等の所業なり其の慘狀實に云ふに堪えず「ケチヂー」氏曰く彼等は到底我儕に追ひ付くと叶ふまじ且つ間だに河を隔つる以上は少しも怖るゝことはあらざる可し邊兒月孫氏曰く實に然り然れども此より決して下る可からず「ケチヂー」氏曰く「ジョーエ」よ此の銃砲ある以上は少しも恐るゝ所なし「ジョーエ」曰く先に銃を棄てざりしが今に至りて初めて其の利を見る「ケチヂー」氏曰く我は決して我が此の旋條砲を棄るとを爲さじ

「ケチヂー」氏旋條砲を取つて懇ごろに裝藥せしが猶十分の藥丸を殘せり

「ケチヂー」氏問ふて曰く今我儕が位置は幾何の高さなりや邊兒月孫氏曰く殆んど七百尺なり然れども我々は此より上ると能はず又隨意に下ると能はず只氣球の意に任すより外に致し方なし「ケチヂー」氏曰く

今若し前日の如き暴風を得バ我儕は一瞬にして數十里の外に飛び忽まち彼の盜賊等の目を離る可きに風い生憎減殺の姿あり彼等一度び砲丸の達內に來らバ一々彼が筒先に掛けて打ち殺す可し邊兒月孫氏曰く然なす時い彼等も同じく長銃を放ち若し氣球を破るときい我儕が運い將さに如何なる可きや少しく此の所を考がふ可し

「タリバス」人等い始終「ビクトリヤ」号の跡を追ひ來りしが午前十一時に至りて氣球い西の方僅かに十五英里の進行を爲せしのみあり此の時邊兒月孫氏遙か向ふの方に當りて一朶の微雲を望みけれバ天氣の變動あらんとを恐れたり若し風位一度び變じて再たび「ナイガル」河畔に吹き戻さるゝことあらば果して如何なる運命に遭遇す可き歟氣球の彼の林上を出發してより既に三百尺餘の降落を爲し行手なる「セチガル」河い猶ほ十二英里の距離あり今の割合にて進行したらんにい

三時間の後ならでハ到着すると能はず

此時追ひ來る蠻人の叫び聲更らに高く聞えけれハ邊兒月孫氏ハ耳を欹て試ろみに空氣計を望み見しに氣球ハ又々降下する有樣なり「ケヲヂー」氏曰く我儕ハ次第に降下するにあらずや邊兒月孫氏曰く然り夫より十五分バかり經るうちに氣球ハ彌々低落して地上を距る僅かに百五十尺に至れり去れども幸はひにして風勢稍や強し其の中「タリバス」人ハ間近く駈け來つて銃を發つと雨の如し

「ジョーエ」叫んで曰く汝白痴漢よ如何に發砲なすとも奈何んぞ我儕に達するとを得ん我れ彼等を止めんとて銃を取り上げ眞先に進みたる蠻人を狙撃せしかバ響に應じて馬より落ち自餘の蠻民ハ皆俄かに止まりたり

「ケヲヂー」氏曰く彼等も性命ハ惜しきものと見えて甚ハだ用心深し邊

兒月孫氏曰く彼等ハ既に我儕を我が物と思ひたるに相違なし此より降下せバ甚はだ危險なり何か又放下せざる可らず「ジョーエ」輿中を見廻して曰く一物の最早投ず可きものなし邊兒月孫氏曰く「ベムミカン」の殘物を投ず可し夫にても三十磅の重量を減ず可し「ジョーエ」諾して直ちに之を投ず

「ピクトリヤ」號ハ殆んど地上に觸るゝかと怪がふ可り降りたりしが此時再だび昇騰したり去れども一時も經ざる間に球中の瓦斯ハ次第に減少し又もや地上近く下りたり稍ありて乘輿ハ終に地上に低落なせしかバ蠻民等ハ咄喊して進み來り既に斯よと見えたる所に氣球ハ又空中に跳ね上り急風に乘じて一英里バかり進みしが再だび地上近く低落せり

「ケヲヂー」氏滿面に怒氣を含んで曰く我儕ハ遂に彼等を避ると能ふま

し邊兒月孫氏曰く「ブランデー」酒の殘餘器械及び其の他少しにても重量ある物ゝ皆悉ごとく投ず可し若し危急の場合に至らば最後の錨を棄るも苦しからず

是に於て「ジョーエ」ゝ空氣計及び寒暖計を取つて放下なしければ暫らく昇騰なせしといへども直ちに低落して更らに其功を見ず

此時蠻民ゝいよ〳〵追ひ迫りて氣球を距る僅かに二百歩に滿たず邊兒月孫氏曰く早く二挺の鉄砲を發ず可し「ケチヂー」氏曰く切めてゝ發砲したる後に捨つ可しとて連けさまに銃を放ちければ數人の蠻民ゝ見る〳〵馬より打ち落さる是を見て蠻民の怒り騷ぐと一方ならず

第三十五回　旅客果斷毀乘輿　氣球畢程歸無常

是より「ビクトリヤ」号ゝ或ひゝ上り或ゝ下り恰かも彈球の上下する有樣なりしが長く繼續す可くも見えず今にも底止せんかと思ゝれたり

正午に至りて「ビクトリヤ」号ゝ全たく其の勢力を失なひ地上に低落し果てゝ最早一歩も進む可らず氣球の礫の摩れ合ふ音ゝ失望して齒を嚙み鳴らすに異ならず

「ケチヂー」氏曰く氣球も最早是迄なり我儕ゝ到底降らざるを得ず「ジョーエ」默して邊兒月孫氏の顏を熟視す邊兒月孫氏首部を掉つて曰く否〳〵未だ下る可らず我儕ゝ猶百五十磅の重量を減ずることを得可し「ケチヂー」氏ゝ是を聞て邊兒月孫氏の狂氣せしにゝあらざるかと疑がひながら果して何ぞと問ふ邊兒月孫氏曰く乘輿を切り落す可し我儕ゝ網の目を踏んで能く河畔に達することを得ん早く乘輿を切り落す可し

是に於て此の勇猛果斷なる空中旅行者ゝ直ちに最後の手段を用ゐ乘輿を切り離して綱の上に登りければ氣球ゝ三百尺高く昇騰したり

「タリバス」人等ゝ馬に鞭うち飛が如くに追蒐け來りしといへども「ビク

トリヤ」号い將さに急風に乘じたれば彼等より遙かに飛び距たり今ま一箇の小丘を超えて猶も西方に進行せり然るに蠻民等い此の小丘を超ゆるを能いざれば北方の路を迂廻して氣球の跡を追ひけるにゞ大いに其の間を距てたり

三人の空中旅行者い緊と網の目に取り付き小丘を超え過ぎければ邊兒月孫氏叫んで曰く河あり〳〵彼の河ころ實に「セチガル」河なり氣球より凡二英里を距て「セチガル」河い水勢轟々と流れたり其河幅甚いだ狹く對岸い低く且つ豊饒にして降下に甚はだ便なるが如し邊兒月孫氏曰く今より十五分間を過しなば我儕は彌よ安全ある可し二友之を聞て喜色あり

然るに邊兒月孫氏の言葉に似ず氣球は次第に瓦斯を減じ地上近く低落して怪石突兀荊蕀鬱蒼たる不毛の廣原に下らんとするの有樣なり

邊兒月孫氏は之を見て頻りに心を痛むるうちに「ピクトリヤ」號は終に地上に觸るゝかと思へば再たび刎ね上りて昇騰し暫らく進行を爲したりしが高さは次第〳〵に減少し氣球の上部忽ち「パチバブ」樹の梢上に繫りたり

「ケチヂー」氏曰く最早如何とも爲し難し河畔へは僅かに百歩に過ぎざる可し

是に於て三人の不幸なる旅行者は氣球を離れて徒歩立となり邊兒月孫氏は二友に手を曳かれて漸やく河岸に至り着き目を放つて之を望むに此の所は水勢尤も急にして其の音甚はだ凄ましく激して一大瀑布を爲す其幅殆んど二千尺高さ大凡ろ百五十尺東より西に向つて流る河中巖石頗ぶる夥たゝしく列を爲して河水を南北に遮ぎりたり邊兒月孫氏は之を見て早くも「ダイナ」の瀑布なるを知覺せり

「ケヂヂー」氏は此に至りて其の渡る可らざるとを知り大いに失望なしけるが邊兒月孫氏は少しも屈する色なく叫んで曰く決して失望すると勿れ萬事未だ全たく終らず「ジョーエ」之を聞て主人を信ずるの心毫も變ぜざりければ聲に應じて答へて曰く我もよく其の然るを知れり邊兒月孫氏此邊に枯草の多きを見るより不圖胸中に一計を案じ出し獨り心に点頭いて二人の朋友を後へに從がへ急ぎ氣球に引っ返へして曰く今十五分を過しなば彼の盜賊等此の所に來る可し一瞬時も失なふ可らず力を極めて此の乾草を搔き集む可し百磅ばかりなくては叶ふ可らず「ケヂヂー」氏曰く汗は又た如何爲し玉ふ積りなるぞ邊兒月孫氏曰く我儕は最早瓦斯を製すると能はざれば餘義なく熱したる空氣を以て此の河を渡る可し「ケヂヂー」氏之れを聞て叫んで曰く嗚呼邊兒月孫君よ御身は實に非常の人なる哉

「ジョーエ」と「ケヂヂー」氏は力の限り乾草を搔き集め忽まち氣球の側に一堆積を爲せり

此の間に邊兒月孫氏は氣球の下部を悉ごとく切り離し其の孔口を廣くなして手早く枯草を其の下に置き火を點して球中の空氣を熱せしに須臾にして氣球は漸々膨張なし瓦斯の流出せざる前に氣球は原形に復したり

時に十二時四十五分「タリバス」人は馬を驅つて將さに北方二英里の邊まで迫り來れり

「ケヂヂー」氏叫んで曰く二十分にして彼等は此の所に來る可し邊兒月孫氏曰く「ジョーエ」よ今少し枯草を持來る可し早くせよ〳〵我儕は十分の後に出發せざる可らず

是に於て「ビクトリヤ」号は忽まち三分の二の膨張を爲したり邊兒月孫

氏叫んで曰く早く以前の如く網の上に上る可し「ケヲヂー」氏曰く心得たり

斯て十分を過ぎし後「ピクトリヤ」号は漸やく空中に昇騰せんと爲せしが蠻民はいよ〳〵迫り來りて既に五百歩の外にあり

邊兒月孫氏曰く必らず手を放す可らず「ジョーエ」「ケヲヂー」氏同音に答へて曰く決して氣遣ひ玉ふな邊兒月孫氏是に於て最後の枯草を火上に向ひ足にて刎ね入れければ氣球は熱度の增加に依りて「バヲバブ」樹の枝を折り直ちに高く昇騰せり

「ジョーエ」叫んで曰く我儕は終に彼等を離れたり

此時追ひ來りたる蠻民等い銃を放つと雨の如く一丸飛び來つて「ジョーエ」の肩先をかすりたり「ケヲヂー」氏之を見て憎き奴かなと呟やきながら隻手を以て銃を放ちけるに忽まち一人を打ち斃せり

此の時「ピクトリヤ」号い八百尺の高さに昇騰し急風を得て進行を始め瀑布の右方を過ぎて河上を超んとなしければ蠻民等い之れを望み只轟々と罵しり騷ぐのみ復た爲す由を知らざりけり三人の大膽なる空中旅行者い不測にも蠻民の害を脫れ氣球に取付きて河上を渡り超えしかば互ひに顏を見合せて喜びの色面に顯われ情極まりて言葉を發するを能わず斯て十分ばかり經るうちに氣球い漸やく降落の姿を顯わしけり

河の向ふ岸にい佛蘭西の兵隊と見ゆる者十人計りあり今此の「ピクトリヤ」号を望み見て深く驚駭の色あり左れ共此の中二人の士官あり一人い海軍少尉一人い見習ひ士官にして先に歐羅巴の新聞を閲し邊兒月孫氏が古今未曾有の一大旅行を明らめ居たりしかば多分夫れならんと考へて此の由を自餘の兵士等に語りたり

此時「ピクトリヤ」号ハ次第々々ニ縮退シ網ノ上ニ空中旅行者ヲ乘セナガラ岸ニ達スルトハ覺束ナク將サニ河中ニ低落セントスルノ有樣ナリ

是ニ於テ佛兵ハ何レモ河中ニ足ヲ入レ三人ヲ迎ヘントスルニ氣球ハ彌々勢力ヲ失ヒ岸ヲ距ル數尺ノ所ニ降下セリ

少尉ハ側ニ進ミ寄リ如何ニ夫ヲルハ邊兒月孫君ニ在サズヤト呼ハリケレバ邊兒月孫氏ハ言葉靜カニ在下ガ即チ邊兒月孫ナリ此ナルハ我ガ朋友「ケチギー」「ジョーエ」ト申ス者ニテ候

斯テ佛人ハ三人ノ旅行者ヲ伴ナヒ岸上ニ上リケレバ「ジョーエ」ハ顧みテ「ピクトリヤ」号ヲ望むニ半バ收縮シナガラ「セチガル」河ノ急流ニ誘ハレ「グィナ」ノ瀑布ニ向ツテ流レ行きけり「ジョーエ」之ヲ見テ愀然獨語シテ曰ク嗚呼憐れむ可シ「ピクトリヤ」号よ斯ル遠國ニ我儕ヲ乘セ來リ我儕ニ盡セシ所實ニ尠々ナラス然るに今ヤ生ヲ失ナヒ我儕ニ相ヒ離れて深淵の中ニ沈みたり嗚呼憐む可シ〳〵と酸鼻みて云ひけれバ二人の友も之れを聞て思ハず感慨の情を發したり

彼の佛兵は何の爲めに此の國に來りたるかと尋ぬるに「セチガル」ある佛國領事の命を受け「グィナ」に城砦を築かんとて屯集したる折柄なりしに圖らず邊兒月孫氏等三人の到着を見て斯くは懇ごろに迎へたるなり

邊兒月孫氏佛士官の手を執つて曰く御身願くハ我儕が到着を保證し玉ハる可シ士官曰く何ぞ否まん然しながら御身等ハ定めて飢餓に迫りたるならん先づ我儕が營所に來り玉へとて三人を營所に伴ひ食を與へ衣を更させ暫待甚ハだ薄からず

次日に至り三人は氣力平日に復しけれバ士官及び兵士の證狀を乞ひ

此に是の一大旅行を終り士官等に厚く禮を述て歸鄉の程に上りしが沿道の土人ハ皆な佛人と親和したる者共なれバ今ハ怖るゝ者更らになく五月二十四日「セヲガル」に達し同二十七日北方なる「メヂナ」に達したり佛國の移住人ハ皆な喜こんて邊兒月孫氏等を迎へ管待至らざる所なく「バシリスク」号なる小蒸瀛船を仕立てゝ河の下流に下りたり夫より十四日を經六月十日に至りて船ハ「セント、ルイス」に着しけるに三人ハ又々此の地の代官に接待せられ厚く其の饗應を受けたり此時折よく英船あり將さに本國に向つて歸航せんと欲する時なり船長ハ邊兒月孫氏等の到着を聞て其の乘船を乞ひしかバ邊兒月孫氏ハ其の厚意を喜こび直ちに其の船に乘り組みて六月二十五日本國の港口に着しけれバ三人ハ共に龍動の市中に歸り一先づ邊兒月孫氏の家に至りたり

去れバ邊兒月孫氏ハ世人の企だて及バざる阿非利加内地の大旅行を首尾よく終り學問上に非常の大稗益を與へけれバ敕立地理協會よりハ燦燿たる金牌の賞與を蒙むり廣く世人の尊敬を博して名望一時に轟々たり

「ケヲヂー」氏ハ兩友に立別れ久し振にて故國蘇格蘭に歸り亞非利加内地より安全に持ち歸りたる有名なる旋條砲を携さへ日々山野に分け入りて麋鹿の類ひを倡となし邊兒月孫氏等とハ絶えず相往來して永く其の舊誼を棄てず以て天年を保ちしとゞ又邊兒月孫氏と忠僕「ジョーエ」の兩人ハ前の如く閑靜なる生活を爲し主從の名ハ棄てざれども其の實ハ親友に異ならず共に樂しく殘日を送りしとなん

阿非利加内地三十五日間空中旅行卷之七　大尾

27382

明治十六年八月十六日版權免許
同　十七年二月中出版

定價金三十錢

譯者　德嶋縣士族　井上勤
赤坂區赤坂新町三丁目廿四番地

出版人　東京府平民　宏虎童
京橋區三拾間堀壹丁目二番地

發兌元　東京々橋區三十間堀貳丁目壹番地
繪入自由出版社

賣捌所

東京馬喰町　自由堂
仝長谷川町　武田平次
仝神田雉子町　櫛々堂
仝八形町　法木徳兵衛
仝横山町　辻岡文助
仝蠣殼町　信文堂
仝同町　報益社
仝日本橋通三丁目　丸屋鉄二郎
仝同町三丁目　滑稽堂
仝新材木町　瓦明堂
仝本船町　湯嶋切通シ福字堂
仝大傳馬町一丁目　指金堂
仝柴井町　松井忠兵衛
仝濱町二丁目　高崎脩介
仝通三丁目　秩山堂
仝銀座四丁目　山中喜太郎
仝三嶋町　山中市兵衛
仝通一丁目　大倉孫兵衛
仝木挽町一丁目　萬字堂
仝一橋通　松江堂
仝日本橋西川岸　須原鉄二
仝日本橋通三丁目　丸善
仝淺草茅町　北澤伊八
仝通油町　水野慶三郎
仝琴平町　靜霞堂
仝座四丁目　博聞社
仝三丁目　小林新兵衛
仝横山町二丁目　内田彌兵衛
仝通二丁目　北畠茂兵衛
仝南傳馬町二丁目　蔦屋吉藏
芝琴平町　本阿彌
飯倉五丁目　岡田善右衛門
仝芝新櫻田町　春陽堂
仝兩國吉川町　大黑屋平吉
仝大傳馬町一丁目　三宅半四郎
仝日本橋通一丁目　伊勢屋金二郎
仝池ノ端仲町　勝々堂
仝芝濱松町　伊勢屋勝藏
仝日本橋村松町　萬字屋鍋太郎
仝南傳馬町一丁目　攝陽堂
仝人形町通長谷川町　具足屋熊二郎
仝和泉町　平野屋周藏
仝兩國米澤町　澤川屋良介
仝淺草茅町　森本順三郎
仝牛込肴町　澤野彌兵衛
横濱太田町　伊勢梅
武州八王子驛　熊澤傳四郎
靜岡江川町　杉本平七

羽後酒田町　小池榮藏
岩代福嶋町通十一丁目　副田文二郎
高知種崎町澤本駒吉
仝境町山中專介
常州土浦田宿　柳旦堂本店
尾州名古屋本町石版社
上州高崎柳川町柳風舍
常州水戸泉町　柳旦堂支店
大阪備後町四丁目岡嶋支店
下總國千葉町立眞舍
三州豊橋鈴木々舍
遠州濱松神明町下仁平

西京寺町通御池下ル　髮堂
江州大津今堀町　西村源二郎
三州岡崎傳馬町淡月堂
陸前石ノ巻三陸屋利兵衛
加賀金澤尾張町野牧作平
信州上田堺屋武右門
札幌縣小樽港永井町小林庄兵衛
遠州濱松紺屋町中村利次
豆州三島川中島町與重
相州横須賀汐留町木
函館大町鈴木
常野嘉兵衛
遠州二俣横町森下新平

F53
V62
2

終